

---

# あなたのそばですっと ~ after ~

しゃーむ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あなたのそばですつと〜after〜

### 【コード】

N8078M

### 【作者名】

しゃーむ

### 【あらすじ】

誠二とめぐのその後を少しだけ…

## 奇跡（前書き）

『あなたのそばでずっと』最終章。  
前作、前々作を読んでいただいてからこの作品を読む事を強くお勧めします。  
完全な続編になりますので。

## 奇跡

この世界で、たった一人の運命の人に巡り逢える奇跡を手にする人は、どれくらいいるんだろう。

少なくとも、オレはその中の一人になったんだ。

そして私も。

オレたちは奇跡を手にしたんだ。

そう、私たちは巡り逢えた。

二人で歩んで行く道。

二人で築きあげる未来。

オレたちが手にした小さな幸せのつぼみは、私たちの手で花を咲かせよう。

オレはもう何も怖くない。

あなたのそばでずっと、幸せを運び続けるから。

私はもう何も恐れない。

あなたのそばでずっと、幸せを噛みしめ続けるから。

めぐのそばで…ずっと。

誠二くんのそばで…ずっと。

だからこれからは。

二人で幸せになろうね。

巡り逢えた奇跡に、感謝して。

## 卒業式

「なあ、ホントに行くのか？」

「だって、元吹奏楽部員っていう立場は誠二くんと一緒にでしょ？」

「そうだけどさあ、なんか卒業式どころじゃなくなる気がするんだよな」

「どういう意味？」

「めぐが突然顔を見せたら騒ぎになるさ」

「だって驚かせたいんだもん」

「まったく……そういうところは子供だよな」

「いいでしょー？あゝ、みんなに会うの楽しみだなあ」

今日は吹奏楽部だけの卒業式だ。

もうそれぞれの場所へ旅立った勇介や他の部員もいるけど、学校にみんなが集まるのは今日が最後になるだろう。

めぐは帰って来た事を誰にも教えてないんだ。

だからさ、騒ぎになって卒業式どころじゃなくなるんじゃないかって心配してる。

紗耶香のやつも怖いぜ。「何で教えなかったの！」って絶対襲いかかって来るに違いない。

めぐが帰って来た日、もうその日のうちにオレは母さんにめぐの家で暮らしたいことを話した。その事については少々渋っていたが、まずはめぐが帰って来た事をすごく喜んでくれたんだ。

まあ、オレが家を出ることに関してはどうでもいいらしいんだが、めぐに迷惑をかけないか、それが懸念材料らしい。

でもね、誠二くんのお母さんに私からもお願いしたんだ。そうしたら快く了解してくれたんだ。「たまには家にも遊びにいらっしやいな」なんてことも言ってくれた。

その三日後から誠二くんと一緒に暮らすことになったんだ。  
大きな荷物はそのまま、服や誠二くんの大好きなゲームを私の家に運んだんだ。

そして、フランスで誠二くん買ったジャケット。それをプレゼントした。あの時、これは必ず手渡すって決めてたジャケット。小さな願いが叶った時でもあったんだ。

その時の話しを聞いて、オレは胸が熱くなった。  
そしてめぐと…。

おっと、これ以上先はご想像にお任せするよ。  
ともあれ、それから数日の間、とても幸せな毎日が過ごせていたんだ。

今までの寂しさを埋めるようにいろんな話しをしていた。時間がいくらあっても足りないくらい。そこで卒業式の話が出て、今に至ってるわけだ。

そういうわけで、今はめぐの家で暮らしてるから朝からバスで学校に向かう。

めぐがフランスに行ってる間は全く来なかった緑ヶ丘町の風景が懐かしい。

バスで学校へ向かっていると、途中で見慣れた人物が乗って来た。「あら、誠二。何であんたがバスに乗ってるのよ?」

…迂闊だった。紗耶香もこのバスだったのか。

「いや、まあ、その…」

もう誤魔化し効かないぞ、めぐ。しかし出来れば誤魔化したい。朝から殴られるのは勘弁だ。

「それに…隣の子。誰だか知らないけど、めぐの代わりなんて言ったらぶつとばすわよ?」

……気付いてないのか?それにしても、気付いてないなら初対面の人がいるのにその言葉は…。さすが紗耶香だ。

「……てへへ。紗耶香ちゃん、ただいま……」  
おっつ……。

身構える必要がありそうだ。

めぐはこちらの気も知らずに舌を出して笑っていた。

「え？……って、めぐ！？なっ！なんで！？」

「えへへ……髪切ったし色も違うからね、気付かなかったでしょ？」

うーん、さすがにマイペースなめぐだ。

「ホント……見違えたわ……っじゃなくて！何でここにいるの！？」

「帰って来たんだよ。日本の楽団に入ることになってさ」

「えっ？えっ？」

さすがに紗耶香も動揺が隠せない。無理もないよな。

「……いつ帰って来たの？」

「十日くらい前だよ」

「……連絡してくれればよかったのに……」

「今日の卒業式でビックリさせたくて。ゴメンね、紗耶香ちゃん」

大袈裟な程のリアクションをとった紗耶香も少し落ち着きを取り

戻したようだ。

今のところ意識はこちらに向いていない。願わくばこのままおと  
がめなしでスルーしてもらいたいもんなんだが。

「連絡……してくれればよかったのに！」

……切り替えが早いぜ紗耶香。

すでに紗耶香の目は獲物をどう料理しようか。そんな目が変わっ  
てオレを睨みつけていた。

誠二くんが危ない！

久しぶりに感じたピーンという危機感に懐かしさを感じた。

「さ、紗耶香ちゃん、私が黙ってっってお願ひしたんだ」

まあ、これはホントのこと。しばらくは誠二くとゆっくり二人  
の時間を過ごしたいってこともあったし。

「そつだぞ紗耶香。めぐの頼みは断れないからな。いい加減大人になれよ」

その余計なひと言まではカバー出来ないなあ。

「うるさいわね！ネバーランドにでも連れて行ってあげようかしら！」

「そ、それはどちらのお国で……？」

「さあ……。行つて確かめてくる？」

「ま、まあまあ紗耶香ちゃん。今日は卒業式なんだし、穩便に」

「…仕方ないな。今はめぐに免じて許してあげるわ」  
ほっ。

「今は……よ？」

あーあ、後が怖そうだな。

でも、こういうこともよくあつたよね。ホント、懐かしい。

紗耶香の攻撃をお助けキャラめぐのおかげで回避したオレは安堵のため息をついた。

その後、めぐの隣の席を紗耶香に無理矢理奪われ、オレは一人寂しく学校へ向かうバスの中を過ごした。

二人は昔話やフランスの話題で盛り上がっていた。めぐはオレだけのものじゃないしな。この場は紗耶香に譲るとしよう。

学校へ着いて三人で部室に向かっていると、まずオレたちの姿を見て駆け寄つて来たのは亜美だった。ウェーブのかかった髪をひらつかせて嬉しそうに駆けて来た。

「誠二先輩！遅かったじゃないですかー。亜美、すごく待つてたんですよー？」

そう言うが、オレたちが部室に向かっている時には、まだ亜美とその他数人しか姿は見えなかったんだけどな。お前はどれだけ先に来て待つてたんだ？

「結構早目に来たと思うぞ？」

「そんなことより行きましょうよ！あれ？その人は紗耶香先輩のお連れですか？ま、誰にしる歓迎しますけどね！さあっ！」

やっぱりめぐには気がつかず、強引にオレの手を引き部室へ連れて行くこうとする亜美だったのだが…。

ガシッ！

めぐがオレの手を引いていた亜美の腕を勢いよく掴んだ。

「痛たっ！なっ、何しやがるです！何ですか！虎ですか！？鷹ですか！？今の手の速さ！」

相当テンパってるな、亜美のやつ。

「歓迎ありがとう、亜美ちゃん。でも残念ながら私は誠二くんの連れだからね」

めぐはそりゃあもう素敵な笑顔だったよ。オレでも一歩引き下がってしまうくらいに怖いスマイルだったさ。

「なっ、何で亜美の名前を！？名を！名を名乗れです！」

「もう忘れちゃったのかなあ？そうだよねー。亜美ちゃんにとって私は邪魔者だったもんねー」

「なっ、何を言ってるやがるです！」

はあ…。

「亜美…。よく話している相手の顔を見てみる」

「顔？顔がどうかしま…。」

ふうっ…これで少しはおとなしくなるだろう。初っ端から一番騒がしいやつに会ったな。

「ひっ…ひえええ！！せっ、誠二先輩！出ました！出ましたよ！めぐ幽霊が出ちゃいましたよー！亜美と誠二先輩を邪魔しに来たんだあー…！」

おうっ、さらにヒートアップしてしまったようだ。

「ひ、ひどいなあ亜美ちゃん。人を幽霊だなんて」

めぐっ！笑顔が引きつってるぞ！

「落ち着け亜美！よく見る！間違はなくめぐだ！」

紗耶香は紗耶香で止めようともせず、シラケた顔で事の成り行

きを見てるし。

「これが落ち着いていられますか！いないはずのめぐ先輩がいるんですよ！？祟りだー！！」

「ふふ…うふふ……亜美ちゃん……うふふ…」

あ…めぐが…めぐが…。

「勝手に人の恋人を殺すな！めぐはこっちに帰って来たんだ！これからはこっちで暮らすんだ！」

「そんなのダメです！めぐ先輩は死んじゃったんです！亜美の中ではそういう設定なんです！」

…はあ。

くだらね。無駄に時間を使ってしまったな。

「めぐ、紗耶香。行こう」

「私は言われっぱなしなんだけど…」

「こいつに絡んでも疲れるだけだつて。ほらっ」

オレはめぐの手を引き、ギュツと手を繋いだ。

「も、もう。相変わらず私の使い方わかってるんだから」

そう言いながら照れてるめぐがかわいい。

意味はわからないけど。

「ちよつと二人とも！私を置いて行こうとしない！前にもこついうことあったわよ！」

「紗耶香？悪い、行こう」

「な、何よ、落ち着いちゃって。自分は大人です、みたいな感じで」

そんなつもりはなかったが何やら頬を赤らめている紗耶香がいた。そんなこんなで部屋へとやってきたオレたちはみんなの到着を待っていた。

パーカッションの楽器が置いてある場所で囲んで座って話していた。途中置いてけぼりをくらった亜美がやってきたくらいで、まだめぐと仲が良かった部員は来ていなかった。

「で、何でめぐ先輩がいるんですか？もしかして亜美と誠二先輩の

ことが心配になってー…ですかあ？」

「そんなことはこれつつつぽちも心配してなかったなあ。はははつ、ごめん、亜美ちゃんの事忘れてたのかもー」

「ぐぬっ……っ、冷たい人間ですねー、めぐ先輩」

「亜美ちゃんこそ私を勝手に亡き者にしてるなんて、人としてどうかと思うけどー？」

子供だな…二人とも。

まあこんなブラックめぐも亜美が相手じゃないと出てこないからな、これはこれで…。

「誠二……」

二人がやり取りしてる間に紗耶香が小声で話しかけてきた。

「あんた、めぐん家に住んでるってホントなの？」

「え？あ、ああ」

「えー……！……！」

うるさっ！！

亜美のやつ、聞こえてたのか？

「なっ……なななっ……ななっ……」

すっごい驚きよう…。

まさに驚愕だな。

「亜美、聞かれる前に言うけどホントだからな。今はめぐと一つ屋根の下だ」

「へっへーん！そういうわけなのだよ、亜美ちゃん。私と誠二くんの間には付け入る隙なし！」

めぐも追い討ちをあっけるように鼻高々と言い放った。

「………諦めません」

…ダメだ。やっぱりこいつには何を言っても無駄なんだな。もはや尊敬するぞ、亜美。

「例え地球が無くなるうとも亜美の愛は無くなりません！」

「オレは例え地球が無くなるうとめぐと一緒にだ」

「ぐぬっ……な、ならいつそ嫌いって言ってもらった方がいいです

！」

嫌い…じゃないよな、うん。これがなければ元気でいい子だし。つていうか何でこういうことになってるかな？

「嫌いだ」

これでおとなしくなるなら…。

グサツ！

亜美の心に何かが突き刺さった音がした。

「誠二…：あんたって酷いやつね」

「いや、亜美が言えて…」

「誠二くん…：そこはウソでも嫌いって言ったらダメだよ」

なぬつ！？めぐまで！？

「え？え！？オレ悪者！？」

な、なんだ！？どうしてだ！？状況がどんどん悪化している！

「な、なかなか効きましたよ、誠二先輩。で、ですが嫌いという言葉には、好きという気持ちの裏返しということがあります…」

……ホントにタフな奴だ。

でもまあ、私が逆の立場なら…：なんて思うと亜美ちゃんには悪いなって思う。

だから亜美ちゃんからどんな嫌味を言われようと、私がそれに返したらダメなんだよね。

「でも誠二先輩。こんな巨乳だけが取取り柄のめぐ先輩といつも一緒に居て楽しいんですか？」

きよっ、巨乳だけ…。

「すごく楽しいぞ」

いや、誠二くん。嬉しいけど巨乳だけってどこ否定しようよ。

「巨乳って案外飽きますよ？」

ま、また巨乳って…。ん、いやいや、いちいち気にするからいけないんだよ。そう、胸だつてステータスなんだから。実は羨ましい

んだよね、亜美ちゃん。

……口に出してはいないとはいえ私が嫌味を……。いけないいけない……。

「まだ飽きる程触ってないし」

カアアアア……！

「せつ、せせつ、誠二くん！な、何を言ってるのかな！？」

「え？あつ！ああつ！ついつい！」

さ、紗耶香ちゃんも亜美ちゃんも……顔……真っ赤っかっか……かっ

……。

「そんなに面と向かって言われると……」

あう……。

「さ、紗耶香ちゃん。気にしない気にしない」

「亜美は一度目撃してますからね……部屋で！」

「そんな昔の話はやめようよ、亜美ちゃん」

「……」

「……」

き、気まずいよ。何とかしなきゃ、この空気……。

誠二くん……も無理そうだな。目を泳がせて……。

「みんな、おはよう」

！……！

誰！？

うつんっ、どこのどなたかわかりませんが、この場に現れてくれたことに感謝します！

私も含めて、その場に居た全員が勢い良く振り向いた先に立っていたのは……。

「な、何？どうしたの？みんな怖いよ？」

「よ、よう。美香、おはよ」

美香ちゃんだった。みんながあまりに勢い良く見たものだから少し驚いていた。

「おはよう。美香ちゃん」

「おはようございます」

「…どうしよう。私も二人に便乗して挨拶を…？でも、びっくりさせたいし。」

「うーん……モジモジ……」

「めぐ……おかえりなさい」

「へっ？あつ…たっ、ただいま！美香ちゃん」

私が逆に驚いた。まさか美香ちゃんの方から話しかけてくるなんて思ってたから。

「なんか普通だな、美香」

誠二くんの言う通り。あまりに普通の反応で拍子抜けした。

「帰って来てたことは知ってたよ。誠二のおばさんに聞いてね。その時には驚いたけど。今日もしかしたら来るかなって。で、見慣れない子がいるなって思ってさ」

「てへへ…せつかく驚かせようと思ってたのにな」

「……よかった。帰って来てくれて」

そう言った美香ちゃんの表情は優しく、でも複雑そうな表情だったんだ。

「ちよつと二人だけで話したいんだけど、いい？」

「え？う、うん」

何だろう。改まって。

「お、おい。美香、何」

「誠二！」

誠二くんが何事かと美香ちゃんに聞こうとすると、紗耶香ちゃんが止めた。紗耶香ちゃんは何の話かわかってるのかな…。

美香は来るなりめぐを連れて行ってしまった。それよりも紗耶香に止められるとは…。

「紗耶香、どういことだよ？」

「美香ちゃんは、きつとめぐに謝るんだと思う」

「は？何を？今久しぶりに会ったばっかだろ？」

「……………ハァー…あんたって、言葉通りの罪な男よね」

オレは何のことかわからなかった。

「私より、あんたの方がわかるんじゃない？」

「な、なんだよ……」

まさかキスしたことか？た、確かにあれは美香の方からいきなりだったからな。

「美香ちゃんは言ってたわ。めぐがフランスに行っちゃって、チャンスって思ってしまったって。あんたのことをね。大事な友達なのに……。多分、それを謝りに行ったんだと思う」

「……………そんなの、黙ってればいいじゃないか」

「そうかもね。でも美香ちゃんのこととは私よりあんたの方がわかるでしょ？」

「そ、そりゃあ…まあ……………な」

確かに、美香はそんな奴だったかな。しっかり者で、人に気ばかり使って……。弱みは見せないで……。らしいっちゃたいい、かな。

「バカ正直だなあ……………」

「ホント、めぐも美香ちゃんもあんたにはもつたいないわ」

「……………言つな……」

そんなことはわかってる。マジでこれから頑張らないとな。

「亜美は蚊帳の外ですかあ？」

「お前はもとより相手にしちゃおらん」

「ムキヤキヤキヤキヤー！！」

私は美香ちゃんに連れられて外に出た。そして、普段は人がいない部屋の裏に。

「つと、美香ちゃん、どうしたの？」

「あのね……………その……………フ、フランスはどうだった？」

なんとも話しくそうに美香ちゃんは重い口を開いた。

「え？あー…うん、楽しかったし、少しだけけれど、成長出来たかなって思う。でも、やっぱりこっちがいいあ。誠二くんいるし、みんなもいるから！」

「あつ…うん、そ、そうだよね」

「…それで？そんなことじゃ、ないんだよね？」

私もそんなにバカじゃなしね。空気くらいは読めるもん。

「…うん。あの…ね…」

「…いいよ、遠慮しなくても」

「遠慮じゃ、ないんだけど…その…ごめんなさいっ！」

「…っ！」

いきなりだった。美香ちゃんはチャームポイントのヘアピンが落ちてしまいそうなほど、勢いよく頭を下げた。

「み、美香ちゃん？」

謝られるようなことは覚えがなかった。当然だけど。帰って来て今日初めて会ったんだ。もし、あるとするなら誠二くん絡みのことなんだろうか。

「私…私ね、ずっと、また会えたら謝らなきゃって思ってた」

「…どうして？」

少しだけ怖かった。誠二くんと何かあったんじゃないかって…。

「ただの自己満足…だと思う。黙ってればいいのに。だけど、聞いてくれる？」

「…うん、聞くよ」

私は美香ちゃんが話すことに身構えた。

「今は…めぐが帰って来て本当によかったって思ってる。ウソじゃないよ？だけどね…一年前の私は違ってたんだ」

それだけでも、美香ちゃんが何を話そうとしているのかわかる気がした。

「チャンス…って思ってしまったんだ」

「それは…前にも話したよ？」

「そう…話してスッキリしたつもりだったんだけど、自分を抑えられなかった。めぐが行っちゃった後でも…そう思ってしまったんだ…だから…だから…グスン…」

「だから、ごめんなさい…か。やっぱり美香ちゃんは優しい子なんだ。だから、そう思ってた自分が許せなかったんだろうな。」

確かに自己満足かもしれない。謝って、スッキリして。だけど、大切な友達だから。

「泣かないで？美香ちゃん。もういいから」

「だ…だから、誠二にキスしちゃったの」

ドクンツ…！

「……えっ？」

私は心臓が跳ね上がった。

思わぬ言葉が美香ちゃんの口から放たれたから。

「……ごめんなさい」

「へっ、へええええっ。そっ、そうなんだ」

「ちょ、ちよっと待って。落ち着いて…おち…落ち着いて、私！

まず整理！

美香ちゃんは私がいなくなっただけでチャンスと思いました、はい。

それで我慢出来ずに誠二さんとキスしちゃいました。終了。

これだけだ…うん、たったこれだけ…。

「本当にごめん…。私から一方的だったから…誠二は悪くないから…」

でも…事実なんだ…。

私は今どんな顔をしてるんだろう。わからないよ。

「そのあと、きっぱりと言われたよ。めぐが好きだから…って、ちゃん。だから、恨むなら私だけを恨んで？許してもらおうとか…思っていないから…」

そんな事言われて…恨めるわけないよ。

イヤだけど…聞きたくなかったけど…。

「ゆ、許す」

「……めぐ……」

責めるのは簡単だ。だけど話してくれたということは、きっと、友達でいたいから……だと思っ。わだかまりを残さずに本当の友達で。たった一度の裏切り。

それを許す術を幸いにも私は持ち合わせていた。

「美香ちゃん、戻ろう！みんな心配するよ」

「また、私に笑いかけてくれるの？」

「当たり前だよー！友達だから！」

笑顔だ。

昔、誠二くんを競い合った。

私と美香ちゃんはお互いにお互いの気持ちを知って競い合った。

美香ちゃんがどれほど誠二くんを好きでいたかなんてわからないけれど、本気だったんだ。

私も本気で好きだった。今はもっと。

だからわかる。美香ちゃんがしてしまったこと。抑えられなかった気持ち。痛いくらい。

だから許す。

それが少しだけでも、私の”罪償い”。

「おあいこ……にはならないだろうけど」

「え？」

「うつん、何でもない！さ、戻ろう？」

思えば私も、美香ちゃん以上に罪の意識があったのかもしれない。誠二くんと一緒に居るのを見られると、少し胸が痛んでいたのを覚えてる。

私が美香ちゃんにつけた心の痛みはこんなものじゃなかったはずだから。

だから、私たちは今日、本当の意味で友達になったのかもしれない。

そう時間も経たずにめぐと美香は戻ってきた。

オレの見間違いないかなければ美香の目元には泣いた跡があった。何を話したのか気になるころではあるが、せつかくの卒業式だ。今は触れないでおこうと思う。ともあれ、二人とも妙に仲が良くなくなっているのは気のせいだろうか。

そんなことを考えながらまた話していると、奈美先生が入ってきた。

普段はカジュアルな格好なんだが、今日はビシツとスーツを着込んで来ていた。

「みんなー！おっはようー！」

…まあ、テンションだけはいつも通りだ。

それから奈美先生は何かに気がついたようにこちらに向かってきた。

「あれあれ〜？卒業生諸君。いくらキミたちの卒業式だからって部外者は困るんだけどなー」

そう言いながらも、別にかまわないうぼい感じだったけどな。

そこでめぐは、スツ…と立ち上がり、奈美先生に向かい一礼して言った。

「先生、お久しぶりです。昨年は大変ご迷惑をおかけしました」

「え？……………あ……………あ……………」

奈美先生もまるで幽霊でも見たかのようなリアクションだ。亜美とは正対だけだな。指を差してわなわな震えている。

「相田さん！？」

めぐはニコツと笑顔で返し、また頭を下げた。

「どうして…？」

「いろいろあって、また日本で暮らすことになりました。お願いがあるんですけど、私も今日の卒業式に参加させてもらってもいいですか？」

「え……………ええ！もちろんよ！それならっ……………」

つと、奈美先生は何かを閃いたように急いで部室を出て行った。

「相変わらずだね、先生も」

「ああ、ずつとあの先生で楽しかったよ」  
ガタンッ！

そんなことを話していると部室の入り口の方から物音がして振り返り向いた。

「めっ……めっ……めっ……」

「な、何？ど、どうしたの？梓ちゃん」

めぐの後輩のフルート二人組だった。

「ね、ねえ舞。あそこにいるの……」

「え？あ、梓ちゃん、だ、誰？」

「ほら、よく見てよ、あの胸」

「む、胸？……あっ……」

「つて二人とも気付くのそこ！？」

めぐのツツコミが部室に響き渡った。

確かにそんなんでわかるんならオレより……おっと失言だな。

「みなさん、おはようございます」

「お、おはようございます」

ツツコミもスルーか……。二人ともなかなかやるな。

ホントにこの子たちは……。

「もつとごうさあ、会いたかったです！とか、めぐせんぱい！と  
かないの！？」

「だって、そんなのベタじゃないですか」

「べ、ベタですよ」

「ベタでも何でも感動の再会シーンでしょ！」

「めぐ先輩ドラマの見すぎー」

「見てない！」

「お、おもしろくないです」

「おもしろくなくていい！……はあ……」

フツッ、やっぱり変わらないな、二人とも。

「めぐ先輩、あとでまた少しフルート教えてくださいよ」

「梓ちゃん……」

「わ、私も」

「舞ちゃん……。よし！二人とも覚悟してね！」

これこれ！懐かしい。あの頃に戻ったみたいだ。

「覚悟って言ってもめぐ先輩甘いしね」

「そ、そうそう」

「……やっぱりあなたたちは……」

それからさらに亜美ちゃんや梓ちゃん、舞ちゃんの後輩の子たちが来たけれど、もちろん「誰？」みたいな顔で見られてた。

その子たちに私のことを紹介するとわらわらとみんな寄ってきて「噂のめぐ先輩だ！」なんて。

どんな噂が流れていたのかは後で誠二くんに追求することにしよう。

だとしても。

「ちよっ、ちよっと待ってみんな！」

「ははっ、やっぱりめぐは人気者だな」

「誠二くん！呑気なこと言っていないでどうにかしてよ！」

後輩の子たちが……。

「先輩！椿先輩をフランスに連れて行こうとして失敗したってホントですか！？」

「ちよっ、なにそれ！？」

「人身売買のマフィアが絡んでたって聞きました！」

「全くなしっ！」

全然知らない後輩の子たちからあることないこと噂されてたみたいで、どんどんわけわからないことを言われていった。

「ほら、騒ぎになった」

「えっ！？こっぴつこと？」



んで眼中に入っていないみていねー」

あれ？

いつの間にか奈美先生が指揮台に座ってた。嫌味そうにみんなに言う。

「あつ……あははは……」

みんなはそそくさと自分の席に戻って行った。

いよいよ始まるんだな、卒業式。

「確かにね、私も驚いたわ。まさかまた相田さんに会えるとは思ってなかったからね。しかもこの部室で」

その言葉に今日久しぶりに会ったみんなは揃って頷いていた。

「一年生のみんなは初めてでしょうけど、よかったわね、噂の相田さんに会えて」

その言葉に今度は一年生のみんながそろって頷いていた。

「そ、そんな、私はそんな大それた人間じゃ……」

「そして椿くん。本当によかったわね」

その言葉に誠二くんは恥ずかしそうに頬をかいていた。

「でも、今日という日に来てくれてよかったわ。相田さん、あなたにとって今日が吹奏楽部の卒業式であり、そして柳ヶ浦高校の卒業式よ」

「……はい！」

私の卒業式……。みんなから少し遅れたけれど、卒業……。なんだ。

嬉しい……。

その奈美先生の言葉を、めぐは嬉しそうに噛み締めているように見えた。目を細くして優しそうに笑っていたんだ。

一緒に卒業したかった。

卒業を迎える時にそう思っていたオレは、この時のめぐの表情を見て、一瞬涙が溢れそうになってしまった。

本当に帰って来てくれてよかった。何度もそう思ったけど、この

時ほどそう思ったことはなかったかもしれない。

「それでは、ただ今より柳ヶ浦高校、吹奏楽部の卒業式を始めます。卒業テープ、授与」

今まで三年間、オレたちが演奏してきた曲を録音したMDが一人に渡される。

後でめぐと一緒に聞きながら思い出を語ろう、そう思った。

そして卒業生全員にMDが渡された。もちろんめぐにも。

そして…。

「卒業証書、授与」

その言葉にオレとめぐを含めた全員が目丸くして奈美先生を見ていた。

「相田恵」

「えっ？あつ…あの…」

突然のことにめぐは驚いてキョロキョロしていた。

「めぐ、ほら行けよ」

「う、うん」

「相田恵」

「は、はい！」

めぐは返事をして照れくさそうに奈美先生の前に立つ。

「相田さん」

「は、はい」

「本当は、この卒業証書はフランスに送る予定だったの。でも何かと忙しくてね、送れないままだったんだけれど…。この手で直接あなたに渡せてよかった。あなたは間違いなく柳ヶ浦高校の卒業生であり、私の生徒でした。卒業、おめでとう」

「せ、先生……。あ、ありがとうございます！」

めぐは両手でしっかりと卒業証書を受け取り、深く頭を下げた。涙を流して喜んでいた。

みんなからは拍手が贈られ、紗耶香も涙ながらに喜んでいて。

オレだけじゃないんだ、めぐと卒業したかったのは。紗耶香も

ちろん、他のみんなだって。大切な友達だから。

めぐが戻ってきてオレの隣に座った。

「誠二くん…私…」

「一緒に、卒業出来たな」

「……うん！」

まだ幼さの残る幸せを絵に描いたような笑顔は、オレが守っていて、そう改めて誓わざるをえない笑顔だった。

「どうしたの？」

めぐが不思議そうにオレの顔を覗き込んでくる。

「な、何でもないよ」

今さらながらめぐの笑顔に見とれていたなんて、気恥ずかしくて言えなかった。

それから現部長から祝辞があり、元部長の美香からの答辞があった。

そして卒業生一人一人が話していく。

美香は部長としてやって来たこと、紗耶香はコンクールへの思いを込めて。オレはこの部で吹奏楽デビューして今までやってきたこと。

めぐは…中学の時にいじめられていて、ここで自分を取り戻せたこと。正直に話していた。それを紗耶香が暖かい笑顔で見守っていた。

それぞれが思い思いのことを話した。

「卒業生のみんな、何度も言うけれど、卒業おめでとう。この部が楽しかったかなんて聞かないわ。ここに居ることが答えでしょうから」

そうだな。奈美先生の言う通り、今日卒業式に来ているのは、旅立ってしまったやつを除けば全員ここにいる。

最後かもしれない別れを惜しんで来ているんだ。

「あなたたちは私の誇りです。今から歩んで行くそれぞれの人生に幸あることを心から願っています」

美香と紗耶香は進学。勇介はすでに仕事をしている。オレも就職だ。めぐも就職？かな。

みんな違う人生だ。同じ学校から旅立ち、違う道へ。

これからまた新しい出会いがあつて、別れがあつて、恋をして、結婚して、子供が産まれて…。そんな当たり前の人生を当たり前前に過ごして行く。簡単なようで難しいことなのかもしれない。

オレたちはまた、大人への階段を一步踏み出した。

「この吹奏楽部で過ごしてきた日々は、きっとあなたたちの糧となつていきます。みんなで協力して一つのものを作り上げる。そんな難しいことをずっとやってきたんだもの。これからも仲間を、友を大事に頑張ってください。本当に卒業、おめでとう」

その奈美先生の言葉が最後となつて、吹奏楽部の卒業式は幕を閉じた。

「めぐ先輩！」

卒業式が終わつた後でもめぐへの質問責めは続いていた。

こりやしばらく帰れそうにないな。

「椿くん」

「あつ、奈美先生、今までお世話になりました」

全て終えてリラックスした感じで話しかけてきた。

「フフツ、どういたしまして。よかったわね、相田さん」

「はい、本当に」

「クスツ…。やっぱり好きな人が近くにいると違うみたいね。一期は見てられないくらいだったのに」

「やっぱいいですよ。隣を並んで歩くのって」

「なあに？独身女性の前でノロケ？あーあ、二人に先を越されちゃいそうね」

「そんな、まだまだですよ。めぐに追いつかないと」

めぐみたいに立派になつて…。

「そんなに気負いすることないと思うわよ？女って好きな人のそばに居れるだけで幸せなんだから」

「そんなもんすかね？」

「そんなもんよ。それはそうと……椿くんの就職先、いい人が居たら紹介して」

「ははっ、なら職場に遊びに来て下さいよ」

「うん、絶対行くから」

「マ、マジだこの人。すっごい真剣。これが目的だったか。」

「い、いい人が居たらですね」

「私ももう三十だもの。贅沢は言わないわ。ちよつとかつこよくて、ちよつとお金持ちで浮気しない人。最後のが一番大事だから。それとね……」

……いつも浮気が原因で別れてたのか。

奈美先生は長々と彼氏の条件を話していく。

「な感じの人」

「最初に言つたの以外わかりませんよ」

「とにかく！……私も焦ってるのよ……うちの男性教師なんかハゲばっかだし」

「うわぁ……。オレにそんなこと言ってどうすんだよ。」

「き、期待しないで下さいね」

「いいのよ、候補はたくさんいるから。……あつ！ねえねえ！」

奈美先生は次のターゲットを見つけたようだ。職場が地元の卒業生を捕まえていた。

「ふうっ……」

先生もオレみたいな恋愛をしてきたのかな。オレはめくと別れるなんて考えられないけどな。浮気か……。いやいや！いらん事を考えるのはよそう。一緒に住んでるんだし。

「誠二！」

「おう、美香」

美香には幸せになって欲しいんだよな。大学でいい人を見つけて欲しい。

「ホントに終わっちゃったね」

「そうだな。長いようで短い三年間だったな。よく聞くセリフか」「でもホントにそうだよ。……高校までずっと一緒だったけど、ついに離れちゃうね」

「近くの大学だろ？家から通うのか？」

「しばらくはね。そのうち車の免許取るか、大学の近くに引っ越そうかなって思ってる」

「そっか……」

もし、めぐと出会ってなかったらオレは美香と付き合ってたのかな……。

「なあ……」

「ん？」

「いい人、見つけるよ」

「……うん」

寂しそうな笑顔だった。

「……やっぱり私、大学の近くに引っ越すよ」

「……ああ」

美香の言いたいことは何となくわかった。オレから離れるってことなんだろうな。

「悪かつ……いや……」

ここで謝ったってどうにもならないだろ。美香が救われるわけでもないんだ。

「クスツ。大人になったね、誠二。私は大丈夫」

「お互いまだまだ子供だろ」

「ううん、誠二は変わった。変わらないのは私だけ。……じゃあね！後輩にも挨拶しなきゃ！」

「……おう！」

そうして美香は行ってしまった。

オレは変わったのかな。昔から一緒に居た美香が言っただから、きっとそうなんだろうな。

「幼馴染に未練ありって感じ？」

「……そんな顔してたか？」  
「あーもう！辛気臭いわね！」  
今話しかけてきた紗耶香と会う事はこれからないかもしれない。  
遠くの大学に行くみたいだから。  
「お前にも世話になったな」  
「そうね。犬としてお世話をしてあげた飼い主に一生感謝しなさい」  
「犬は飼い主に似るって言うけど、あれって嘘だったんだな」  
「……どういう意味かしら？」  
「サツつとオレは身構える。」  
「……ふんっ！あんた、めぐを頼んだわよ」  
「お……？まだそれを言うか」  
「めぐは日本の楽団に入るようになったからって言うってたけど、本当はあんたのそばに居たいから帰って来たんでしょ？」  
「ま、まあ……そうだな」  
「あんた、プレッシャーとかないの？そこまで想われて」  
「あるさ。しつかりしないと思って思うよ。オレが幸せにしてやるって」  
「だからまだ言うつのよ。その余計な考えを捨てなさい」  
「はあ？」  
「普通よ」  
「普通？」  
「めぐは普通を求めているの。ただの日常。ただ、めぐと笑って話せばいいのよ」  
「そんなの当たり前だろ？」  
「当たり前に出る？正直めぐはスゴいわよね？あれだけの才能を持つてる。きつとこれからも活躍するわ」  
「いいことじゃん」  
「だからよ。あんたはそれに足並み合わせようとしてるでしょ？そんなの出来るわけないじゃない」  
「そ、それは……」

だからこそ、頑張ろうって思ってるんじゃないか。

「私のはあんたがそのプレッシャーに負けないか心配してんのよ」  
「だから…か」

「そうよ。これから社会に出て、変わるなって言う方が無理な話し。でも、変わったらダメなのよ」

「……わからねえ」

「そのうち身に染みて感じるわよ、多分ね。そうならないように精々”普通”でいることね」

「”普通”ね。よくわかんねえけど、うまくやっていくよ。紗耶香も元気でな」

「私のことなんて心配ないわよ。今度また会う時にもめぐと一緒にね」

「ああ」

今度つていつなんだろうな。遠くならそう何度も帰って来れないだろうし。

「寂しくなるな」

「じゃあ今のうちにいっぱい体に染み込ませてあげようかしら？」

「それは勘弁な」

こんな紗耶香でもやっぱり変わるんだろうか。いや、変わるよな。みんな確実に大人になっていくんだ。

「なあにしんみりしちゃってるんですかあ？亜美なら誠二先輩の職場に遊びに行くから心配しないで下さいね！」

「……いいよな、お前は」

「なっ、なんですか！その小バカにしたような言い方！」

「亜美ちゃん、いろいろあったけど楽しかったわよ」

「紗耶香先輩。紗耶香先輩の指導は一生忘れません。わ、忘れられるわけありません」

紗耶香は……厳しかったんだ。もちろんオレに対しても。

「ふふふ…コンクールはなるべく見に来るからね」

「は、はい…」

「おーおー、紗耶香の前だと亜美も素直だなー。」

「これからのパークションをお願いね」

「うっ……」

亜美は顔をしかめていた。

「自信持ちなさい。そしたら誠二も見直すかもね」

「また余計なことを……。結局はオレに押し付けか。」

「そんな目で見るな」

亜美は文字通り目を輝かせてオレを見つめていた。なんか……頭を撫でたくなるような……。

「なでなで……」

「きゃうくん……」

「うむ、かわいいじゃないか。」

「誠二くんっ！」

「め、めぐ！」

「なーにやってるのかなー？」

「い、いや、つい……」

「つー！私以外をそんな顔にさせちゃダメだよ！」

「わ、悪い！悪かったよ！」

「誠二先輩……。ごろにゃくん」

亜美は顔をスリスリしている。

「ぐっ……くく……」

「お、おい、めぐ？落ち着いて……な？」

「今日のご飯、誠二くんの嫌いな物ばかりで作るよ？」

「そ、それは……オレにとってはまさに生き地獄。」

「亜美離れる！頼む！」

「……聞き捨てなりませんね。さっきの言葉」

「ん？」

「何のことだ？」

「まさに一緒に暮ります的な発言……」

「めぐのご飯のことか？」

「こっぴどくやります！」

亜美は思いつきり抱きついてきて、ほっぺにチュウまでやりやがった。

……悪くはない。

「こらーっ！誠二くんもなすがままじゃない！」

「ま、待って……」

「お仕置きだよ！今日は生野菜のサラダ！」

「ぐはあっ！」

ナマモノはダメだ！勘弁！

「お刺身！」

「ぐはあっ！」

あの冷たい魚の感触は……。

「魚介類たつぷりのパエリア！」

「ぐはあっ！」

もう……匂いだけで……げふう。

「め、めぐ……」

「なに？」

「せめて……サラダじゃなく野菜炒めにい」

「青汁、追加……」

「ぐっはあ！」

ダメだ……終わった……。オレの運命は餓死なのか……。

「誠二先輩！誠二先輩！ちよっ、めぐ先輩！真っ白になってるじゃないですか！」

「亜美ちゃんが誠二くんをそこまで追い込んだんだよ」

「えっ……。あ、亜美のせい……」

「そうだよ。介護が必要みたいだから連れて帰るからね」

「はい……」

イヤだ……。帰ったらナマモノ地獄が……。

「誠二くん、帰るよ！」

「は、はい……」

「なら私も帰る。めぐ、一緒に帰ろうね」

「うん！」

「うおお…。ブラックめぐと紗耶香に挟まれるのか…。」

「じ、じゃあな、亜美。そういうことだから」

「はい…。あ、あの、すみませんでした。亜美のこと、嫌いにならないで下さいね」

「はは…」

今日嫌いって言ったことはすでに頭がないようだ。亜美らしい。

「大丈夫だ、大丈夫。オレの晩飯を心配してくれ」

それからみんなに挨拶をして部屋を出た。

紗耶香の人望は思ったより厚く、別れを惜しむ部員が多かった。

姉さん肌だったからな、紗耶香は。

美香はめぐに連れられるオレを笑って見送っていた。その時ばかりはオレも今日の晩飯の恐怖は忘れていたな。やっぱり美香との別れは寂しく思う。一人で暮らすと言った美香が遠くに行ったような気がした。

三人で奈美先生にお礼を言った。

涙目だったオレに「私も椿くんがいなくなるのは寂しいわ」と言っていた。これは恐怖からきている涙だというのは一生の秘密だ。

帰りのバスの中、誠二くんはうとうと唸っていた。私が本当に誠二くんの嫌いなものオンパレード料理を作ると思ってるんだろうか。でも、たまにはこういうのもいいかなと思う少し意地悪な私が出た。「めぐ、よかったね。卒業式」

「うん。みんなにも会えだし、何よりもこの卒業証書。みんなと卒業した、そんな気になるな」

「何言ってるの。一緒に卒業したんだよ」

「……うん」

紗耶香ちゃんは今もう明日には出発するみたいなんだ。私は連絡し

なかったことを後悔してた。

「あ、あの、紗耶香ちゃん」

「なーに？」

「今度はいつ、会える？」

「……わかんないな。向こうでの生活が忙しくなるならなかなか帰って来られないだろうし……」

「そっか……。そっだよな……」

「でも……大丈夫だよ」

「え……？」

「一年ぶりにめぐところして会ったって、何も変わらない友達だったもん。どんなに離れたって……。それに私、国内だし！」

「も、もう。紗耶香ちゃんってば、意地悪」

「あははっ！でも、時間があればなるべく帰るからさ、その時は遊ぼうね」

「うん！」

私は卒業証書を握り締めつつも、卒業した喜びと紗耶香ちゃんとの別れの寂しさで複雑な思いだった。

「それにほら、誠二がいるから大丈夫でしょ？」

「……うん」

二人で誠二くんを横目に話していた。

「明日、何時？見送りに……」

「ん……。朝早いからいいよ。駅まで車だしさ」

「……でも……！」

「いいっていいって……。親の前で泣いちゃうのも恥ずかしいし」  
紗耶香ちゃんは少し困ったような笑顔だったんだ。

「次は……」

「あっ……。紗耶香ちゃんが降りると」。

「じゃあね、めぐ。メールするから」

「あっ、うん。ほら、誠二くん！紗耶香ちゃん行っちゃおうよ！……」  
横でいじけていた誠二くんを振り向かせる。

「あ、ああ。紗耶香、達者でな」

「私が言ったこと、忘れないようにね」

「んあ？お、おう」

「二人とも、何の事？」

「めぐを大事にしなさいってことだよ。……それじゃ……ね」

紗耶香ちゃんは軽く手を振ってバスを降りて行った。私は見えなくなるまで手を振っていた。

「紗耶香ちゃん……」

寂しい……。辛いな、この気持ち。

そうだ、私がフランスに行った時にも、誠二くんや紗耶香ちゃんはこの様な気持ちだったんだな。

「めぐ、泣いたっていいんだぞ？」

「誠二くん……。ううん、またすぐに会えるから。きつと……」

「……そうだな」

だから泣かない。涙は会えた時の嬉し泣きにとっておくんだ。

「誠二くん。今日のご飯、何がいい？」

「えっ……。め、めぐー！ー！」

「あはっ！」

誠二くんが嬉しそうに抱きついてきた。

やっぱりめぐはオレの女神様だ！

地獄から救い出してくれる！

「だけどさ」

「うん？」

「美香ちゃんとキスしたって……」

……美香、ちゃんと置き土産はしてるんだな。

「そ、それは……」

「どうなのかな？誠二くん？」

め、女神様と閻魔様を使い分けるなんて、成長したじゃないか、

めぐ。

「お、お怒りですか？」

「美香ちゃんから話しは聞いたからね、誠二くんは悪くないって。ぜんつつつぜん怒ってないよ。ただ、どうしてそんなことになっちゃったのかなあって」

怒ってらっしゃる怒ってらっしゃる怒ってらっしゃる。

「めぐが行ってしまった後、み、美香が何かと気にかけてくれてさ。その……余計なこと聞いたのはオレだけ……。ふ、不意打ちだったんだ！」

「ふう〜ん。ま、美香ちゃんだからまだ許せるけど、それが亜美ちゃんとなら……。あー！想像しただけでも悔しい！」

「し、しっかりとライバル視してるんだな」

「誠二くん!!」

「は、はい！ごめん！」

く、口は災いの元だよ、みんな。

「……ふう……。逆の立場ならイヤでしょ？」

「……イヤだ！」

……一瞬、他の男とめぐがキスしているシーンを想像してしまった。オレなら耐えられるだろうか？

「めぐ……ごめんな」

「わかればよろしい。さ、もう着くよ。お買い物して帰ろう」

「おう。……今日は料理手伝ってみようかな」

「えーっ……。余計手間がかかりそう……」

「な、なんだよ！やれば出来るんだぞ！」

「じゃあ、ジャガイモの芽でも取ってもらおうかな」

「目？ジャガイモって生き物なの？」

「………やっぱいいや」

「え？」

「誠二くんのおバカ」

「なにを！よーし！今日は誠二特製料理を作ってる！」

「…遠慮しとく。明日を無事に迎えたいし」

「なっ…！ひ、ひどいぞめぐ！」

「クスツ、冗談だよ。一から教えてあげるね」

「お、おう…！」

その後はひどい有様だった。オレは料理の大変さを何一つわかつちやいなかったんだ。

めぐの手際の良さには尊敬しっぱなしだった。

結局オレは配膳係と片付け係だった。

なんとも情けない。

「り、料理は私の得意分野だからさ。誠二くんが出来なくてもいいんだよ」

なんてことを言われるが、何かしてあげたい、そう思うから。

「誠二くんとこうして暮らしてるだけで幸せなんだから」

そこで紗耶香の言葉が頭の中をよぎった。

暮らしてるだけで…か。特別なことなんていららないんだな。紗耶香の言った通りに。

頑張らなくていい、なんてことは思わないけど、こんな生活がずっと続いていけばいいなって思っていた。

お互いに仕事が始まってどう変化していくんだろう。この時にはオレはまだ何もわかつちやいなかったんだ。

「お風呂、い、一緒に入る？」

「もちろんだ！めぐ！」

ただ、楽しかった。幸せだった。

まるで世界中の幸せを一人占めしているかのようだったんだ。

## それぞれの情事

「おはようございます！今日からよろしくお願いします！椿誠二です！」

朝から元気いっぱい挨拶するオレ。

仕事始めつてのはこんなもんだろ。

そうなんだ。今日からついに社会人デビューだ。昨日は緊張しまくりだった。もちろん今日出勤している時もそわそわしていた。

職場まではバスで通う。時間は一時間弱くらいかかるかな。めぐの愛妻弁当を片手に出勤だ。

柳ヶ浦町よりも市街地に近い黒岩町の街はより賑わいを見せている。

その黒岩町に去年オープンしたショッピングモールの中にある楽器店のスタッフとして就職したんだ。

店内にはいろんな楽器が所狭しと並べられている。ギターやベースにドラム、キーボード、ピアノ。管弦楽器にタンバリンなんかも「改めてよろしく、椿くん。面接の時に話したけど、僕が店長を任せられている花澤だ。みんな、自己紹介を」

今話したのが店長の花澤真一さん。身長は百八十センチ以上あるだろうか。オレも見上げる程背が高い。歳は三十六。既婚者で子供も二人いるらしい。その割に若く見えて、あごヒゲを綺麗に整えていた。話すとき優しい感じなんだが、ぱつと見た感じは強面のお兄さんだ。髪は少し長めの茶髪にパーマ。それにニット帽をかぶっていた。

基本的にエプロンさえしておけば私服で髪型もある程度自由らしい。みんなラフな服装だったし、髪を染めている人もいる。

「オレは坂本勇馬さかもとゆうま！みんなのリーダー的存在だ！よろしくな！新人！ちなみに彼女はいない！そこよろしく頼む！」

次に自己紹介したのは声が大きくて体格のいい先輩だ。なんとな

く勇介に似ている。だが勇介のようにいじめることは出来ないだろうな。黒髪の短髪で服の上から見てもわかるくらい筋肉質だ。まるでスポーツ選手。歳は三十前後か？

「私は園田沙希そのたなか！何を隠そう君と同じ柳ヶ浦高校出身なのだ！だから遠慮はいらんよ！新人くん！いやー、どうかよろしく頼むよ！」  
なんか、お気楽な感じのあいさつだ。

どうやら同じ高校の出身らしい。先輩の先輩だな。後で聞いたら今年で二十三歳。学校で一緒になることはなかったみたいだ。明るめの髪色でショート。身長は百六十ないくらいでなかなかスタイルがよくて元気な先輩だ。

「ど、どうも、神崎留美かんだきのみです！これから、よ、よろしくね！」

うーん、頑張ったんだな。なんとも恥ずかしそうに自己紹介していた。

肩くらいまでの黒髪で目がくりくりつとしていた。小柄でメガネをかけていた。人見知りを結構するらしく、メガネはまともに話すと恥ずかしいからしているという伊達メガネらしい。

「つとまあ、以上。君を入れてのシフトを組んでやるから、そのつもりで。基本的に仕事は坂本くんに教わってくれ」

花澤店長がそう言ってそれぞれ仕事の準備に取り掛かっていた。オレの指導は坂本先輩がしてくれるそうなんだが…。

「よーし！じゃあさっそくやるか！まずは新人の登竜門、掃除だ！気合い入れていくぞ！」

「はい」

「声が小さい！気合い入れていくぞー！」

「は、はいー！」

い、いきなりの熱血指導か？楽器店だよな、ここ。まだお客さんいないけど恥ずかしいよ。

「まずはフロアだ！モップ掛け！塵ひとつ見逃すなよ？」

すっかりやれってことだよな？ホントにそこまでやらなくていいよね？

オレは気合いを入れてモツプを掛ける。

「よし！そうだ！もつと腰を使うんだ腰をー！」

こ、腰！？腰を使うってどういうことだ？

「……………何をやってるんだ？」

「いや、腰を……………」

腰を思い切り引いた反動でモツプを使っていた。

「気持ちは伝わる。だが何かの間違ってはいるぞ？」

わかってたさ…何かおかしいことくらいは…。

「よし、フロアはこれでいい！次は店先の通路！これもしつかり頼むぞ！今のところは開店前には一応これだけだ」

「はいっ！」

それから通路のモツプ掛けをした。これだけなら楽勝だな。

他の人は並べられている楽器をいろいろチェックしたり、レジの準備なんかをしていた。まだオレが手を出す範囲じゃないな。

その後朝のミーティングだ。

売上の話しや営業方針、注意を花澤店長が話していた。もちろん内容はさっぱりだ。

もうすぐ開店時間。このショッピングモールが開く午前十時から午後七時までの営業なんだ。その中に一時間の休憩時間。他の店はもつと長く開いているところもある。

この店は五階建てのショッピングモールの四階にあり、エレベーターのすぐ近くだ。一番人通りがあるだろう。同じフロアには、雑貨屋、携帯ショップ、本屋があった。本屋が大半のスペースを占めているんだけどね。

だから老若男女問わずに人が集まるフロアなんだ。

開店前にと、それぞれに挨拶周りをさせられた。どこの店でも「よろしくね」と笑いかけてくれた。今のところ人間関係で苦労はなさそうだ。

今頃めぐは何してるんだろう？

.....

今頃誠二くんは仕事始まったくらいかな？

どうなんだろう？

もう怒られたりしてないかな？泣いてないかな？

今日の夜はいっぱいお話し出来そう...

今日から誠二くんが仕事だということで、早起きしてお弁当を作ったんだ。栄養のあるもので体力がつくおかず。それとね、浮気防止をかけて。

信用してないわけじゃないんだよ？一応ね、一応。愛妻弁当なんて一緒に住んでますってことだしね。

誠二くんって誰にでも優しいから誤解を招く可能性だってあるでしょ？

さ、私は愛する誠二くんが気持ちよく家でくつろげるようにお掃除しないよ。そして帰って来るときにはお風呂と出来たての夕飯を準備しておくんだ。

へへ...私ったら良い奥さん！えへへ...

フルートの練習も怠らないようにしないと。五月に公演の予定がある。合同練習が二週間前くらいからあるんだ。だからその間は家を留守にしないといけない。会場が近くじゃないから。

誠二くんにとっても寂しい思いをさせていまうんだ。ごめんね、誠二くん。罪な私を許して下さい...っと、変な妄想入るところだった。

掃除が終わったらお買い物行かなきゃ。今日の夕飯は何にしようかなー。

.....

「い、いらっしやいませ！」

「ダメだぞ後輩、そんなんじゃ。顔が引きつっておる。どれ、同じ

高校のよしみ、私がお手本を見せてしんぜよう」

今は園田先輩から接客指導の受けている。

さつき記念すべき最初のお客さんを接客した時に、緊張で力チコチになってしまったんだ。

あまり人見知りはない方だとは思っただけど、やっぱり仕事となるとちがうんだな。失敗しないように、失敗しないように、なんて思っていたら逆に縮こまってしまった。

「いらっしやいませー！何かお探しですか？」

園田先輩が元氣にお客さんに対応している。素晴らしい営業スマイルだ。

「あ、その商品でしたらこちらにございます！他にも何かありましたらお声を掛けて下さいね」

すごい、手慣れている。当たり前っちゃ当たり前なんだけど、それが当たり前になるのにどれくらいかかるんだ？

「どうだい！見たかね？元氣よく！笑顔で！丁寧に！わかったかい？後輩よ」

「はあ……」

不安。

早くものしかかる重圧。

簡単だ。基本だ。自分に言い聞かせる。

「そーんなに考えなくてもいいんだよ？笑顔でいれば少しでもミスつてもいいってもんさー！」

…この人も最初はオレみたいな感じだったんだろうか？この感じからは想像すら出来ないけどな。いつも笑ってるみたいだから。

「あの、園田先輩も最初はオレみたいだったんですか？」

「私？もっちろんさー！いやー、あの頃は苦労したよー。毎日仕事に行くのがイヤだったねー」

「へー、全然そんなふうには見えませんけど」

「まー、今と同じ仕事じゃなかったけどさ、毎日怒られてばかりで。ミスしないようにって思うと逆にやっちゃうんだよねー」

あつ…。同じだ。

「でもさ、言われたんだわ。」自信を持って”ってさ。簡単に言うよ  
ね？こつちゃーまだまだヒヨッコだっていうのにさ」

「ですね。仕事のことまだわからないのに」

「そう！そうなんだよ！だから必死で覚えたよ。そしたら自然に笑  
顔になれて自信もついた。ミスつても取り返せる！まずは…」

仕事を覚える…か。

「慣れだね」

「慣れ？」

「おうよ！当然だけど、仕事に慣れる！お客さんに慣れる！雰囲気  
に慣れる！まずはそつからだい！」

「そつからっすか」

「おうよ！そのためには働け働け若人よ！」

結局はやるしかないってことか。でも、元気は出たかな。

「ありがとうございます」

「いやー、もう少しマシなこと言えればいいんだけどね！ま、頑  
張ろうよ！」

よし！笑顔だ！少しでも周りから吸収して早く自信つけないと。

それからまだぎこちない笑顔だったけど、とにかく笑顔が続けた。  
最初はレジ打ちを教えてもらった。まあ、数字打っただけなんだけ  
どさ。お金のやり取りだから慎重にならざるをえなかったね。

管楽器やパーカツのことならある程度わかるけど他の楽器はさっ  
ぱりだ。勉強しないとな。

一応、研修中の札を胸の名札に貼ってあるから、何かあれば頼り  
になる先輩たちにすぐ助けを…。

オレはそのままレジに立っているわけだが…。

「すみません、ギターのネックの反りを直して欲しいんですけど」  
お客さんっ！！

おおつときたー！何だ？ネック？首か？首だろ？ってオレが考え  
ても仕方ない。

誰か…！

「し、少々お待ちください」

誰か手の空いている人はいないか！？

ん、あれは…！

「か、神崎先輩！」

「えっ！ええつと、な、何かな？」

一人ぶらぶら暇そうにしていた神崎先輩を見つけた。

「あのお客さんがギターのネックを直して欲しいらしいんですけど、オレじゃわからなくて…」

「えっ！お客さん！？う…ううーん…わ、わかったよ」

なんとか神崎先輩を捕まえたんだけど…。

「お、お待たせしました！ネックですね！は、拝見させて、い、いただいてよろしいですか？」

……カッチコチだ。オレ以上なんじゃないのか？

「こ、このくらいならすぐに、ち、調整できますので、て、店内でお待ちくださいい！」

神崎先輩がそう言うってお客さんはレジを離れた。その人も心配そうに神崎先輩を見ていたな。

「神崎先輩、すみません」

「い、いいよー。じ、じゃあ私はこれを直すね」

神崎先輩はさっそく作業に取りかかった。オレは少し離れたところから様子をうかがっていたが、作業内容が気になって覗きに行っ

た。

「へー、そうやって直すんですね」

「ひゃっ！う、うん。つ、樁くんもすぐに覚えるよ」

あ、初めて名前と呼ばれた。

「先輩はこういう仕事長いんですか？」

「う、ううん。前にバンドやってたから、が、楽器のことは少しわかってただけど…接客業はこ、ここが初めて」

「バンドっすか！？わからないもんだなあ。何やってたんですか？」

「……ボ、ボーカルと…ギター…」

「ボーカル！？先輩が！？」

「そ、そうだよ」

「うへえ……」

ホント、わつからないもんだなあ。こんなに人見知りするのに人前で歌ってたんだ…。

「あ、あと、敬語いらないからね。同い年だから…」

「えっ！？」

た、確かに歳聞いてないし若いとは思ってたけど…。

「新人ー！休憩入れー！」

あつ、もうお昼か。

「じ、じゃあお先に」

「う、うん。ゆっくり休んで」

そして裏のスタッフルームへ。

それにしてもタメだったなんてな。でも先輩は先輩だから、失礼のないように。

スタッフルームにはロッカーが並べられていて、小さなテレビがついていた。五畳くらいの部屋で真ん中に四角いテーブルが置いてあった。

今、そこにめぐが作ってくれた弁当を広げてる。オレが食べきれない範囲の食材で栄養を考え、色合いまでばっちりだ。

「おつ、なんだいなんだい愛妻弁当かい？いやー、羨ましいねえ」

「あつ、園田先輩も今からですか？」

「おうよ！一緒に一緒にさせてもらおうよー！」

ホント、この人は元気な人だ。落ち込む姿なんて見れたらレアだろうな。

「彼女？まさかそれを自分で作ったとか？」

「彼女ですよ。一緒に住んでるんです」

「くわあー！若いのに大人な生活してるねえ！」

「先輩こそ、彼氏はいないんですか？」

「ぐっ…そ、それを聞くのかい？」

「あっ…いや…」

園田先輩は思い切り顔をしかめて言った。

「いないのか？いないんだろ？な、結構かわいいのに。」

「いやあ、どうも男女関係ってやつに疎くてねえ。しばらくいないさねえ」

「じゃあ、前はいたんですね」

「ぐあああ！そ、そこまで聞くか！聞きたいかい？聞きたいのかい？私のにがーい青春時代ってやつを！覚悟しなあ…悲しみのどん底に突き落とすぜー…」

「ま、また今度にします」

「うむ、それがいい。とても涙なしには語れないんだあ…」

おう、すでに涙が…。こりゃあ相当な目にあってきたんだろうな。今後も触れないでおこう。

さーて、弁当弁当ー。

「ところで椿くん」

「ふあい？」

「うむ、飲み込んでからでいいよ。部活は何してたの？」

「んっ…んぐ…。すいません、吹奏楽部に入っていました」

「お？おおおお！こりゃあまた奇遇だねえ！私もなんだよー！」

マジか！？ええっと…歳が四つ違うから…。

「村田千秋！」

「おおお！千秋ちゃんを知ってるのかい！？」

「そりゃあ、部長してましたから」

「へ？うへえ！そりゃまたビックリ仰天大ニュースだ！あの千秋ちゃんかねえ…へええ…」

な、なんかオレが知らないこともいろいろ知ってそうだな。

「で、椿くんは何やってたの？」

「パーカツです」

「パーカツかあ。私が三年の時には一年はパーカツ入らなかったか

「らなあ、誰も知らないや」

「そうだな。オレが入った時にも三年はいなかったし。」

「先輩は何してたんですか？」

「私はフルート！こう見えても華麗に！優雅に！美しい音色を奏でてたんだぜー？」

「めぐと一緒にだ」

「めぐ？それがお前さんの彼女の名前かい？フルートしてたんだね、いい選択だ！」

「小さい時からやってたみたいですよ。両親が有名な人で…」

「へー、名前は？」

「相田恵です」

「ぶっ！？相田っていうとあの相田夫妻！？そりゃ有名だわ」

「そ、そんなに驚く程有名なのか？会った時には普通の人だったけどな。」

「普通のおじさんおばさんですよ？」

「あ、会ったことあるのかい？くわあ、ぜひサインをお願いしたいね」

「サ、サイン？どんだけだよ。」

「おーい！新人ー！」

「ん？坂本先輩が呼んでる？」

「おっ、沙希もいたか。今日の夜にお前の歓迎会をやるうって話しなんだが、都合いいか？こっちは三人ともOK。お前ら二人がいいなら作戦決行だ！」

「えっ、そんないきなりだな。めぐには何も言ってないし…。」

「あたしゃーもちOKです！隊長！」

「うっ…じゃあ後はオレだけ？仕方ない…かな…。めぐにはメールしておこう。」

「オレも…大丈夫です」

「よっしゃ！じゃあ場所は決めておくからな！たらふく飲んで食えー！」

「うつしやー！宴会じゃー！」  
うわー、すごいハイテンション。ついていけるかな？  
それだけ言つて坂本先輩は仕事に戻つていった。  
めぐにメールを……。

……

） ……

ん、誠二くんからメールだ。今頃お昼休みかな。  
なんだろう？お弁当おいしかったよ！とかかな？うふふ…わざわざ  
そんなメールするなんて私ったら愛され……えっ！？  
そんなあ…。歓迎会だつて…。帰りは遅くなるのかなあ。  
今日はいっぱいお話し出来ると思つてたのに…。残念。  
でも、これもお仕事なんだよね。仕方ない、か。  
じゃあ今日の夕飯は一人か。せ、せめてお風呂だけでも用意して  
おかなきゃ！きつと気疲れしてくたくたで帰つて来るだろうから。  
早く帰つて来てね、誠二くん。

……

） ……

ん、めぐか。えーと、帰り何時くらいになる？か。  
「園田先輩、帰りつて何時くらいになりそうです？」  
「そりやわっかんないなー！みんな飲むしねー。なんだい？めぐち  
やんにメールかい？」  
「はい、風呂の支度とかもあるそうで…」  
「くっはあっ！いいね！いいね！羨ましいねー！」  
「あっはは……」  
「仕事で遅くなる旦那様を待っている女。健気だね、健気じゃない  
か！よっしやあー今日は帰さーーん！」

そ、それはホントに困る！

「さすがに帰らないと……」

「むふふ……。果たして現場でも同じ言葉が出て来るか見物だよ、椿くん」

「そ、そんなに盛り上がるんすか？」

「ふっ、それは後のお楽しみさ。君が空気を読めるやつかどうかは今日、決まる……」

目をキラリと光らせて言った。

「ほ、ほどほどに……」

「むふふ……。さあーて！私は一足先に仕事に戻るから。椿くんはもうちょこつとゆっくりしてなよ。……本当に大変なのは夜だからねえ」

不気味な捨て台詞を吐いて園田先輩は仕事に戻って行った。

ふう……。めぐに心配かけちゃうな。ちょこちょこメールしないと。

そして休憩時間が終わりオレも表に出た。交代で坂本先輩と神埼さんが。花澤店長が最後だった。

その後もたいした仕事はしないまま、就業時刻を迎えた。

花澤店長がレジ締めをして、他の四人は帰りの身支度を始めた。

『今仕事が終わってこれから歓迎会だよ』とメールを送る。それに対しての返事は『お疲れ様。早く帰って来てね』だ。

おそろくめぐの期待に答えられないことに罪悪感を感じながら店を出た。

場所はすぐ近くの居酒屋だった。

「さー、それではあ、椿誠二くんの歓迎を祝してえ………かんぱーい！」

「……かんぱーい！」

「か、乾杯……」

今、オレが手にしているのはビールのジョッキ。ノンアルコールではなく、間違いなく本物の酒だ。

居酒屋で席に着くやいなや「生五杯！」の声。その注文に耳を

疑いながらもここにいる人数を確認した。間違いなくオレを含めて五人だ。

そしてオレは未成年だ。そしてもちろん神崎さんも未成年だ。しかし、平然とうまそうにビールを飲んでいる。

「どうした、椿くん。飲まないのか？」

「花澤店長、そう当たり前のように言いますが、当たり前のようにオレ未成年なんですけど？」

「それがどうした？」

何を言っている？というふうな顔で聞いてくる花澤店長。いや、あなたが何を言っている？

「居酒屋……。それは我々にとって憩いの場でありオアシス。ここでは上司も部下もない、無礼講だ。飲め、椿くん。店長命令だ」

いや、あんた今上司も部下もないって…！

「椿！飲め！気持ちよくなれるぞー？」

うわっ、坂本先輩すでに二杯目！

「そうだー！飲め飲めーい！」

園田先輩もすでにジョッキが空だ。

「椿くん、おいしいよ？」

「あの一、オレら未成年だよ？」

「そうだね」

「そうだねって…未成年はお酒飲んだらいけないんですけど？」

「一緒に飲もうよ！椿くん！ほらっ、飲んで？」

オレは園田先輩と神崎さんの間に座り、向かいに花澤店長と坂本先輩が座っている。で、隣の神崎さんがビールを勧めているわけなんだが…。

「ちょ、ちょっと待って！酒、飲んだことないし」

「なに？留美ちゃんのお酒が飲めないのかー！？」

う…園田先輩…。近い、顔近いつす…。酒臭いつす…。

「ねっ、一緒に飲もうよお。ほうら…」

か、神崎さんも顔近い…。いい匂い…。

「クツ…ククク…顔真つ赤だぞ？」

坂本先輩が笑っている。そうか、これは仕組まれた席順なんだな。そしておそらく、酒癖が悪いのはこの二人…。

「ほらほら飲め飲めーい！」

「うわっ！んっ、んぐ…！」

ゴクツ…。

うええ…。

「何だこれ…苦え…。みんなこんなふうまいて言っただけで飲んでいるの？」

「なあに言ってるのお？まだまだお・こ・ちゃ・ま、だねー」

ちなみにオレの耳元で囁くようにこう言ったのは神崎さんだ。普段とは全然違う。

「も、もう酔ったの？」

「まだまだ全然だよ。うふっ、椿くん、かつこいい〜」

いや、だからさ、顔近いんだって！

普段かけている伊達メガネも外して顔がはっきりわかる。かわいなんだ、これが！

「うりゃあ！飲め飲め飲めー！」

この人はさつきからこればかり！

「ククク…、人気者だなー、椿」

「そんなこと言っただけで助けて下さいよー！」

「歓迎されてるじゃねえか。しっかり味わえよ」

「うーりやりやりやりー！」

うわっ！ちよっ…！がほっ！

「っげふっ…！う、うっぷ…！」

「おりゃおりゃー！まだまだリバーには早いぜー！食い物詰め込みなー！」

「はい、あーん…。…あんっ、もうっ、園田先輩ったら乱暴〜」

はっ、はががが…！？

「んっ…んぐっ…みっ…水っ…！」

無理矢理詰め込み過ぎだつて！

「はい、どうぞ。椿くん」

「あ、あひあと……んっんっ！？ぶへえ！何だこれ！？」

「んー？しょうちゅー」

こ、これが焼酎というやつか！ビールよりはまあ、飲めるか？そんなに苦くないし。

だけど……。

「うおえっ……クラクラする……」

「はっはっはー！椿くんはホントに飲みは初めてかー？どうだ？楽しいだろー？」

楽しくない……気持ち悪くなってきた……。店長もテンション上がってきてるな……。

「今日の主賓は君だぞ？たらふく食ってたらふく飲むんだぞ！なに、金のことは心配ないぞ。もちろん主賓である君が出す必要はない！だから」

おう、おしゃべり店長に早変わりだ。

坂本先輩と園田先輩は普段からあんなテンションだしな。神崎さんは、なんか色っぽくなってる。

「うわっはははー！さすが隊長！いい飲みっぷりでー！」

「まだまだ沙希には負けんぞー！」

飲み比べが始まったご様子で……。

「ねえ、椿くうくん。一緒に飲もうよお」

「あ、あの、神崎さん？」

「なんならあ、口移しで飲ませてあげようかあ？」

お、おいおい……。

「あーっ！ずりい！オレにもオレにも！」

「だめえ、おじさんはいやあ」

「ぐああ！オレってばまだギリ二十代！」

「オ、オレ、トイレに」

「おっ、椿ー！つれしょん行くかー？」

「え、遠慮しときます」

「うわーっははは！照れてやがる！」

ダ、ダメだ…やっぱりついていけない…

そしてオレは席を立った。

「うおっ！？」

立った瞬間足元がふらつくのを感じた。周りを見ると世界が歪んで見える。

「椿くん、大丈夫か？」

「へ、平気です。行ってきますね」

花澤店長が気遣ってくれた。酒は入っているものの、まだそんなに酔ってはいないみたいだ。

オレはふらつく足を押さえながら壁伝いにトイレへ向かった。そして個室に座り込んだ。

「気持ちわるっ…」

歩いたら余計に酒が回ったみたいだ。

ふと携帯を手にしてみるとメールが何通か届いていた。全部めぐからだ。今は夜の九時前。

心配してるな、めぐのやつ。

.....

誠二くんからのメールの返事が来ない…。

気がついてないのかな？き、きつとそうだよね。

でも…。

他の女の人と一緒にいる誠二くんが脳裏に浮かぶ。多分女の人も…いるんだよね…。

たとえお仕事でも…イヤだな。

あっ！メール！

誠二くんだ！

うーん…え！？

お酒、飲んでるんだ…。

なんか…なんかイヤだよ…。想像したくない…。もし…もし何かあったとしてもお酒のせいになれそうで…。

…ううん、ダメだ。私が誠二くんを信じられなくてどうするの。

早く、早く帰って来て。誠二くん。

それからテレビを見たり、本を読んだりして気を紛らわせるけれど…不安でたまらなかった。

誠二ちゃんと付き合いだしてからこんなに不安になったのって初めてかもしれない。離れてた時以上だ…。

一緒に暮らし出してからずっと一緒だったから、余計に不安が募る。

…。

メールだ…誠二くん…？

…！！

「ダメ…ダメだよお…。ひっく…。私、強くなって…」

大丈夫、大丈夫だから…。

…。

「うあ…うう…」

「だーっはっはっ！もうギブアップかあ？椿？」

「うう…」

「ではでは皆の衆、そろそろ二次会でも行きますかい？」

に、二次会！？ウソだろ！？オレにはもう無理！だいたいめぐが待ってるし…！

「あの…園田先輩…」

「んん？何だい何だい？ま・さ・か、とは思っけど、もう帰りますとか言っんじゃないだろっねえ？」

「あ…いや…」

「主賓なくして宴会ならず。覚えてるかい？私の言葉を」

園田先輩の言葉？

(君が空気を読めるやつかどうかは今日、決まる。むふふ…)  
この事か？この事なのか？

「よっしゃー！まだまだ行くぞー！」

「うふっ、これからですね」

「まあ、明日の仕事に差し支えないように……騒ぐぞ諸君！」

い、言えない……。いや、勇気を出せ！勇気を出すんだ誠二！めぐが帰りを待っているんだ！それに体力の限界も……。

「ゴニョゴニョ……どうだい？椿くん。このテンションの中……言えるかい？君は言えるのかい？」

「うっ……」

「ふふーん……。いやー、君は空気を読めるやつだったんだね！我が輩は安心したぞえ」

こんな中で、はい帰りますってサラッと言えるやつなんていないだろ。

結局はオレの歓迎会だとしても、オレは終始気をつかいつぱなしで気疲れするし、慣れない酒を飲んで具合悪いし……。

大変なんだな、大人って……。

「それじゃ、二次会はお決まりのカラオケじゃーい！全員出撃い！」

「あ、あの、まだ行くって……」

「やつほーい！」

き、聞いてねえ。聞こえていたとしても……かな。

めぐ……ごめん。

メール……しとかなきゃ……。

……

「私、強くなつて……！」

大丈夫、大丈夫だから……。

二次会行ってくたって、お仕事、お仕事なんだよ。

私が理解してあげなきゃ。

今日は本当に一人…か。

前はずっと一人だった。

だけど今は…。

『起きて待つてるね。無理し過ぎないようにね』

これが私のせいっぱい。

.....

「いつつえーい！！ごせいちよー、ありがとーっ！」

はあ…。一体いつまで続くんだ…。

「次、椿くん、曲入れた？」

「えっ、ああ…いや、まだ…」

「どうしたんだねー？飲みが足りないんじゃないのかねー？」

「いつ！？つ、次！椿誠二！歌います！」

もう酒は勘弁だ。カラオケに来てからは酒は飲んでいない。さすがに翌日に影響するからと断った。少々ハイになっていたオレもだいぶ冷めてきたんだが…。

それでもテンションが落ちただけで体調は最悪。少しでも体を揺らされるとリバースまっしぐら状態だ。オレの胃袋は常に緊急発進に備えて警戒態勢がとられている。歌っている間はだいぶマシなんだけどな。座っているときは顔を上げねえ、動けねえ。

ついでに言えばオレのテンションと裏腹にみんなのテンションは最高潮。温度差が開き過ぎて温暖化真っ最中と氷河期くらいの差があるな。

エコだぜ、エコ。

「ねえ椿くうくん。これ、一緒に歌おうよ」

相変わらずオレは女性二人に挟まれていた。

「いやいや、これにしようぜ」椿くん。盛り上がるぜ？」

「園田先輩さつき歌ったじゃないですかあ」

「だからこそ、このままの勢いで突っ走るのだよー、留美ちゃん  
ああ…やめて、二人とも。僕は逃げませんから仲良く順番に。オ  
シを挟んで喋られると酒の匂いがきちゃうのよ、これまた。」

「私が歌いますっ!」

「いや、これだね!」

「お前ら仲良くなー」

すでに花澤店長と坂本先輩は傍観者と化している。歌ってるのも  
両サイドの二人がほとんどだし。

「椿くんに決めてもらえば?」

店長: 余計なことを!

「ですね!椿くん、どっちと歌うかい?」

「もちろん私とお、このー、しっとりらぶバラードだよね?」

「何を言う!そんなのあとあとー!ロックンロールで暴れまくるぜ  
い!」

「オレはどっちでも……」

出来れば二人と一緒に歌ってくれと助かるんだが…。

「君に決定権があるのだよ。さあ、選びたまえー」

「やっぱり選ばないといけないんだよな。ロックより、バラードかな。  
体力的にも。」

「じゃあ、神崎さんと」

「あはっ!留美うれしっ!」

二重人格だよ、もはや。

「にや、にやにおー!何だい!?何が気に入らなかったというんだ  
い!?生かすから!この次に生かすから教えてくれー!」

「し、しまった!神崎さんとじゃなくバラードと言っべきだったか  
!?」

ユツサユツサユツサ…!

「うおっ!うぷっ……ちょ…その…だ先輩、や、やめ……」  
「げええええええ……。」

「……あっ……」

……  
やっちまった……。

……

「すみません……」

「い、いやー、私がちょっと無理させすぎたね」

「うむ、トドメは沙希だったな」

「う、うう……」

はあ……。

やったよオレ。

部屋の中にオレのリバーアタックをぶちまけてやったんだ。今世紀最大の環境汚染だったね。

そのおかげでカラオケもお開きになったんだが、最悪な終わり方だったな。

「椿くん、一人で帰れるか？」

「はい、タクシーで帰りますよ。さっき出したおかげで少し楽になりましたし」

「初日からすまなかったな」

花澤店長はいい人だ！

「いやいや、楽しかったですよ」

「ま、早く帰って休むようにな」

そしてタクシーを拾って帰路についた。

めぐにメールをしたけど返事はなかった。怒ってるんだろうか。無理もないかな……。

タクシーの中ではいつの間にか寝ていて、家の近くで運転手さんに起こされて目が覚めた。

家の電気はまっだついていた。今は午前一時。普通ならとっくに

寝てる時間だ。だとしたらやっぱり怒ってるんだろっか。メールの返事はまだ来ていない。

飲み帰りのサラリーマンはこんな感じなんだろうか。玄関のドアを開けるのが少し怖い。いやいや、こんな時間まで待っていてくれたんだから。

ガチャッ…。

「ただいまー……」

返事はない…。

「めぐー…?」

オレは恐る恐る明るいリビングへと足を進ませる。リビングのドアの隙間から光が漏れている。

気分はだいぶ良くなったとはいえ、まだまだ酒臭いのが自分でもわかる。

「めぐー…?」

リビングのドアを開けた。

「なんだ……」

めぐはリビングのソファで横になって寝ていた。その右手には開きっぱなしの携帯が握り締められていた。

そしてテーブルには今日めぐの作った料理が並べられていた。

二人分、きれいに残っていた。食べて来るって言ったのに。

もう一度めぐの寝顔を見る。

……このまま寝かせておくか。

先にシャワーを浴びよう。スッキリしたい。

バスルームのバスタブにはお湯が張っていて、そのお湯はもうぬるかった…。

「んっ……」

私、寝ちゃってたんだ…。今何時…?」

一時か。もうそんな時間。

……あれ？

何か音が……シャワーの音！？

誠二くん！？

私はバスルームへ急いだ。

帰って来たんだ！誠二くん！

ガラッ！

「誠二くん！」

「うわっ！めぐ！？」

「誠二くん！」

シャワーを浴びていた誠二くんを背中から思い切り抱き締めた。

「誠二くん……！」

「めぐ…悪い、遅くなった」

「ホントだよ。寂しかったんだから……」

「ごめん。帰ろうにも帰れない雰囲気です……」

「うん……」

わかっているんだ。誠二くんは悪くないの。ちゃんと帰ってきてくれたし。

「誠二くん、お酒臭い」

「あー、だいぶ飲まされたからなあ。めぐも、服びしょびしょだぞ？」

「いい。まだお風呂済ませてないから」

「お湯、温めなおすか」

「うん」

それからシャワーを浴びながらバスタブのお湯を温めなおした。

チャプ……

「誠二くん、もういいよ」

「うん。よつと……。あー、癒されるー」

「クスッ、どうだったの？楽しかった？」

「いやー、気をつかっただけで、めっちゃくちゃ疲れたー。大変だったー」

誠二くんはぐったりしてる。ホントに疲れきってるみたい。

「お仕事は？」

「仕事はまだまだ。掃除とレジ打ちだけ。でも職場の雰囲気は悪くないかな」

「そっか。…女の人も…いるんだよね？」

「ん？うん。…なんだ？めぐ、心配してるのか？」

「えっ！いや…うん…少し…」

「ははっ、大丈夫だって。めぐと付き合ってることは言ったし。一緒に住んでることも。それに、オレはめぐが好きなんだぞ？」

「…うん…えへへ…」

「そうだよ。私たちは愛し合ってるんだから。少しでも疑っちゃうなんて、私バカだなあ。」

「ね、誠二くん、ご飯は……って、食べてきたよね」

「わかってたけど、いつも通りに作らないとイヤだったんだ。ちやんと二人分。」

「いや、せっかく用意してくれたんだし食べるよ。食べたものはほとんど残ってないしな…」

「え？」

「具合悪くなつて…戻した。みんながいる中で」

「誠二くん、汚い…」

「あれは…仕方なかったんだ…」

「あ、あれ？本気で落ち込んでる？」

「は、初めてお酒飲んだから仕方ないよ！」

「うん…。うあー！でもやつちまったんだー！あんな狭い部屋の中で胃酸の香りが部屋中に…うっ、うぶっ…思い出したらまた吐き気が…」

「そ、想像したらイヤだな。」

「今日は早く休んで、明日お話し聞かせてね」

「うん。ああ、明日っていうかもう今日、しんどいだろうなあ」

「ふふ…頑張ってるね、誠二くん」

その後、誠二くんは疲れ果てていたのだろう、夕飯を食べるのも忘れてリビングのソファで眠ろうとしていた。そんなところで眠ると疲れが取れないだろうから、無理矢理にでも部屋に向かわせた。

…仕事か。

誠二くんは私より一歩先に大人になったんだな。

私ももう少ししたら仕事が始まる。そうしてそれぞれ別々に仕事をし、今まで通りに二人の生活が出来るのだろうか。

私は少し心配していた。

今日みたいなことが頻繁にあるとすれば、私は普通に過ごせるのかな。これから私たちの間に溝が生まれまいだろうか。

仕事という新しいことが始まって、二人とも新しい世界に入り込む。当然、今までと何ら変わらない、なんてことはないはずなんだ。お互いの絆が試される時が来るんじゃないかと私は予感していた。

もっと分かり合っていないといけないのかもしれない。そんなことをにわかに考えつつ、私は眠りについた。

一人

「大丈夫？ホントに出来る？」

「大丈夫！任せとけて！」

「心配だなあ。ゴミはちゃんと分けてね？ゴミ出し日は月曜と木曜だから」

「わかってるって。安心して行っておいで」

「ううゝ…じゃ、じゃあ行って来るね？お風呂掃除もするんだよ？」

「はいはい。了解」

「もうっ…メールするからね」

今日からめぐが公演のために家を離れる。その期間約三週間。その間、家のことは全てオレがやるわけだ。めぐはそれをすごく心配していた。

メシはどうにかするとして、掃除と洗濯くらいはやれるだろうと思っっている。

まあ、料理の手伝いは出来なかったとはいえ、片付けや掃除はちょこちょこやっていた。そうしようと前に約束していたからな。

ともあれ、今日の夜からは生まれて初めての一人の生活だった。なあに、うまくやれるさ。

……と、思っていた。

.....

ああゝ…心配だなあ。

料理は私しか出来なかったとして、掃除も洗濯も誠二くんのやり方って中途半端だったからなあ。帰ったらゴミの山なんて…ううゝ…想像しただけでもイヤだなあ。

今日からやっとなおの仕事が始まる。

公演の場所はここからバスで駅に向かって電車を乗り継いで着く

ところ。移動時間は五、六時間くらい。楽団の理事の人からは近くに住む場所を用意するからと言われたけど、もちろん丁寧に断りました。だって私は誠二くんのそばに居るために帰って来たんだから。ジャンから連絡があつて、「初めは慣れないだろうけど、メグミの言葉を信じるよ」と言われた。それはきつと私が誠二くんのそばならなんでも頑張れると言ったことなんだろうな。そのつもりだし、その事に関しては絶対の自信があるから。帰ったら誠二くんがいるつて考えただけでも力になる。

楽団に関して不安がないわけじゃない。理事の人からも「君のような若さで入ることは異例だから」と言われた。その言葉には異様なプレッシャーがかかっていたんだ。期待なんてされてると思つてない。私なんか邪魔者つて思われるかもしれない。でも頑張るんだ。私だつて、立派な大人になつてみせる。

「えー：以前から話していたように、本日よりこの相田恵さんが加わることになりました。まだ若いのでみんなの協力を必要とするかもしれません。ぜひとも力を貸してあげて欲しい」

理事の人が練習前に私を紹介してくれた。乾いた拍手で歓迎される。

みんなの前に立つだけでプレッシャーがかかってきていた。特に私のことには触れることなく練習は開始された。以前もらっていた楽譜を広げ、同じフルートの人に軽く挨拶を交わした。

さあ、これから始まるんだ。

.....

「椿くん、遅刻ギリギリだぞ？最近どうした？慣れてきたからつてたるんでるんじゃないのか？」

「す、すみません。すぐに準備します」

一人の生活で意気込んでいたんだが、家のことをちゃんとやろうとすると大変だった。

朝起きて朝食を済ませ、着替えて家を出る。朝食はパンを焼いて食べていた。それくらいはわかるから。

最初の二、三日は普通に過ごせていたんだ。けど、洗濯物がたまってきたから洗濯をして、風呂掃除もこまめにやれと言われたからやって、夕飯を食べて…なんてやってたら思ってた以上に時間がなかった。それでいて仕事で疲れている体だ。きつかった。することしたら早々にベッドへ。倒れ込むように寝た。

翌朝、いつもはすぐ起きるのに目覚まし時計のスヌーズに助けられ、慌てて仕事に向かった。一本バスを逃せば遅刻ギリギリの時間だ。

めぐが家を離れて一週間過ぎる頃には、そのギリギリの時間が当たり前になっていった。

よって、花澤店長に叱られたわけだ。

家事なんてたいたことないのかもしれないけれど、今までめぐに頼りつきりになっていたんだということを感じた。

そのめぐはうまくやれているみたいだ。フランスとは違いメールが出来る。電話もかかってくる。初めてのオーケストラで緊張していたらしい。めぐでもやっぱり初めてのところは緊張するんだな。めぐについては何も心配していない。仕事のこと、男女関係のこととも。

それに比べるとオレには心配事だらけだ。

覚えることがたくさんあった。楽器の種類、特徴、メンテナンスの方法、営業の仕方、商品の仕入れなどなど。営業時間内はお客さんがいようというまいとフル稼働だ。

家でも少しは勉強しないといけない。そして家事。もちろん遊ぶ暇なんてないし、そんな相手もいなかった。

.....

「お疲れさまでしたー」

ふう…今日も終わった…。

さすがに気を遣うから疲れるな…。

もう一週間経った…。誠二くん…電話では大丈夫みたいなこと言  
つてたけど…。

「相田さん、よかつたら夕食一緒にいかが？」

「あ…えーと…はい」

今私を誘ってくれたのは同じフルートの金子由香里さん<sup>かねこゆかり</sup>。このオ  
ケの中では歳が一番近い二十三歳。何かと気を遣ってくれる優しい  
先輩だった。私は”由香里さん”って呼んでる。美人で気品がある  
んだ。

この近くに住んでいるらしくて、この付近のことをいろいろと教  
えてくれたりもした。私はこの公演の間はウィークリーマンション  
を借りてそこに寝泊まりしてる。誠二くんもだけど、私も久しぶりの  
一人暮らしなんだ。

「近くの居酒屋でいいかしら？」

「い、居酒屋？は、はい…」

以外だな…。由香里さんはお嬢様っぽいから居酒屋なんて行かな  
いと思ってた。私も行ったことないんだけど…。

それから連れられて店に入ると、居酒屋は居酒屋でも洋風居酒屋  
だった。個室でオシャレなテーブルとイスが並べられていて、そこ  
に向かい合わせで座る。

「飲み物は？お酒飲む？」

「い、いいえ！ウ、ウーロン茶で」

「うふふ…お酒飲んだことないのかな？まだまだ子供だもんね」

「こ、子供じゃないですよ！」

「あははっ…ごめんなさい。私はジントニックにするわ」

それからいくつかの料理と飲み物を注文した。暗い店内で見る由  
香里さんは大人の雰囲気、お酒を一口飲むと頬を赤らめて満足そ  
うなため息を吐いていた。

「どう？今のオケは？」

「やっと慣れてきたくらいです。でも、みなさん良い人なのでこれからうまくやっていけそうです」

「よかった。そうね、悪い人はいないかもね。それにしてもその歳ですごいよね、相田さん」

「い、いえ。たまたま良い出会いがあつて紹介状を書いてくれたので…。実力なんて思つてません。みなさんのことを見ると私なんてまだまだなんだつて思います」

由香里さんは軽く微笑んでまたお酒を一口飲んだ。

「ご両親だつて立派じゃないの」

「はあ…。まあ…そうですね」

誰と話してもお父さんとお母さんの話しは出て来るんだよね。毎度のことだけど、受け答えするのが面倒になる時がある。

「どうして日本に戻つて来たの？ご両親の近くでならもつと活躍出来たでしょう？」

「えっ？そ、それは…」

こう聞いてくる人は珍しかった。大体は両親の話しで終わるから私自身のことについて話すことはほとんどなかったんだ。

「日本が恋しかったの？」

「そ、そうなんです！向こうは慣れなくて…」

なんとなく、誠二くんがいるからこっちに帰つて来たつて言うのが恥ずかしくて。

「気持ちにはわからなくもないけど、甘いわよ？」

「えっ…」

「私たちはプロなんだから」

「あ……は……はい……」

そうなんだ。自分がこの世界に居て、私がしてきたことは甘いことなんだつてわかつてる。同じ世界に生きる人たちから見ると、私が甘えてることなんて。

「確かに相田さんは私から見てもすごい逸材だと思うわ。だけど、どうかしらね。私はあなたがこの世界で埋もれていくのか上り詰め

ていくのかが見えないの」

「……………」

「ごめんなさい。気を悪くさせちゃったかな。でもせっかく同じオケにいるんだから、気が付いたことは話しておきたくて」

「は、はい。ありがとうございます」

「さ、食べましょ」

私自身がまだこの音楽の世界に入りきれてない。そうなんだろうな。練習が終わると頭の中は誠二くんのことばかりだから。

やっぱり…こんなんじゃないかな。立派な大人になるって言うてこつちに帰って来たけど、まだ気持ち成長してないんだ。

「そういえば、次の公演はテレビでも放送されるみたいよ」

「えっ！？テ、テレビ!？」

「ふふっ、初めてかな？そんなに驚かなくても、公演の模様を撮るだけだから心配しないの」

そ、そんなこと言っても…恥ずかしいよ。テレビなんて…。

「まあ、相田さんのことは紹介されるみたいだけだね」

「なっ…!?わ、私何も聞いてませんよ!？」

「公演の模様の最中に紹介だけよ。インタビューとかじゃないからな、なんで？私なんかほっといてくれていいのに」。

「ご両親のこともあるからね。お化粧バッチリしとかないとね」

「あ、あう…」

誠二くん…。ううん、恥ずかしいから黙っておこう。何も言わないならそんな番組見ないはずだし。

……………

「最近は愛妻弁当はなしかい？ケンカかい？」

「違います！今はオーケストラの公演で出掛けてるところです」

「おー！さすが相田夫妻の娘！やるねえ！」

「その言い方……。めぐはめぐです！」

「そ、そんなに怒らなくてもいいじゃん。ゴメンさあ」

「なんだか気がたつていた。普段ならそんなこと気にしないのに。」

「い、いえ。すいません」

あの歓迎会の翌日、オレ以外の四人は平然と仕事に出てきていた。

オレの倍以上は軽く飲んでただけだ。これもまた慣れ、なのかな？

「じゃあ今は一人暮らしかい？」

「そうですね、大変っすよ」

「あー、わかるわかる！家に帰ってもゆっくり出来ないもんねー」

「園田先輩も一人暮らしですか？」

「うんにゃ、実家だよ。いやー、ははっ、前に一人暮らしに憧れて

やってただけだね……。私にゃー無理だったわ」

「ははっ、先輩家事しなさそうだから」

「にゃにお！こう見えてもけっこう料理得意なんだぜー？だけど面

倒くさいしさ、なんか自分だけのご飯作るのって寂しいじゃん？」

「へー、寂しいって言葉が出るなんて思いませんでしたよ」

「椿くんは私をなんだって思ってるのさ！れっきとした乙女なのだ

よっ」

「ははっ、そうでしたね。忘れてました」

「む……。キミには先輩に対しての礼儀というものを教えてあげな

いといけないみたいだねえ」

お……。ちよい言い過ぎたかな。キラリと目を光らせて何かを狙って

いる。

「そこだあ！」

「椿ー！お客さんだぞー！」

「ちっ！」

オレに客？誰だ？それにしても何をしようとしてただこの人は

もう昼飯食ったからいいけど……。まさか……。

オレは何か言いようのない直感的な危機を感じた。園田先輩をあ

しらい表に出てみると…。

「誠二さん。来ちゃいましたあ」

「そうか……今日は日曜日。」

「何をしに来た、亜美。冷やかしならお断りだ」

そこには亜美が立っていた。相変わらず嬉しそうにオレの前で尻尾をふっている。

「お客さんに対してその物の言い方はなんですか！今日はドラムスティック買いに来たんですう！」

「おお、そうか。それならあっちにある。じゃあな」

かまっけてたら面倒なことになりそうだ。

「ちよい待ち！誠二さん！」

「誠二さん？」

「……何だ？その呼び方は」

「だってもう卒業しちゃって先輩じゃないですから。誠二さんが妥当じゃないですか」

「気持ち悪い」

「誠二さんが気持ち悪くても亜美はそう呼びます！誠二さんって！

誠二さん…この響き…ムフフ…」

「はあ……。好きにしる。じゃあな、忙しいんだ」

「そうは見えませんか？」

うん、確かに他にお客さんはいない。

「何だ、用件があるなら早くしてくれ」

「案内して下さい。お客として。亜美はお客ですから」

「ぐっ……っ、こちらです」

「にゃはっ！」

くそっ！嬉しそうにしゃがって。まあ、悪い気はしないかな。だけど……。

「コソコソ……あの娘、椿くんの何かな？」

「コソコソ……仲良さそうですけど……」

聞こえてる、聞こえてるぞ！

「亜美のこと、恋人に見えるんでしょうか？」

亜美がにんまりと笑って聞いてくる。

「残念ながらめぐのことはすでに話している」

「ちえっ、あっ、そういえばめぐさんテレビに出てましたね」

「めぐのこともめぐさんかよ……っではあ！？テレビ!？」

「あれ？知らないんですか？まあ、コンサート風景が映ってその中に居ただけですけど」

テレビに映るなんて…有名なところに入ったんだな…。楽団の名前だけしか聞かなかったし、気にもとめてなかったけど。すごいな…。でも、電話でもメールでもそんなこと一言も言っていなかったぞ。

「名前は紹介されてましたよ。ご両親のことも。めぐさん、期待されてるみたいですよ」

「あ、ああ、そうか…」

なんだ…すでにちよつとした有名人じゃん。クラシックとか興味ない人にはなんでもないだろうけど。

「すごいですね、めぐさん。そこでは負けを認めます」

「……ああ」

「誠二さん？」

なんだ、この感じ…。

なんかこう、すごく不安っていうか…。

めぐ？めぐはめぐだよな？

「誠二さん!」

「あ、ああ、すまん。スティックだったな。そこにあるぞ」

「どうしたんですか？ぼーっとして。もうっ…。ねー、どれがいいと思います?」

いくつかのドラムスティックを眺めながら聞いてくる。

「自分が好きなやつにしる。もしくは全部買ってくれ」

「それはお願いですか？亜美にお願いですか？」

あーっ、うげえ。

ただ、亜美と話している間にもめぐのことが頭から離れなかった。

テレビに出たことじゃない。それもこのモヤモヤの原因の一つかもしれないけど…めぐが遠くに行った気がした。フランスと日本とかいう距離の問題じゃない。今度は、どんなに手を伸ばしても届かないような…。

世界が違う。

それが一瞬頭をよぎった。住む世界が違うんじゃないかって。そう思わなくていいことを、その時に思ってしまったんだ。

「これにします」

「ん？そんなに買うのか？」

亜美はドラムスティックを五セット持っていた。

「遙ちゃんと真琴ちゃんにも。あと、誠二さんの知らない新入生の分も。部室のやつはもうボロボロですから」

「おっ、ちゃんと先輩らしいことやってるな」

それから部活のことについてしばらく話しこんでしまった。つい懐かしくなって。そして、お客さんがちらほらと増えてきたところで亜美は帰って行った。

「椿くん、あの娘誰なのさ？まさか…」

「先輩が期待してるようなことは何もありません。ただの部活の後輩ですよ」

「なーんだ。じゃあ私の後輩でもあるわけか」

一応そうなるな。

ん、そうだ…。

「園田先輩、彼女のめぐが入ってる楽団のコンサートがテレビで放送されたらしいんですけど、めぐって有名人になるんですか？名前とか紹介されてたみたいですけど…」

「ほーっ！そりゃすごいね！期待の新人って感じかな。なんだね？彼女の自慢かね？」

「そんなんじゃないっすよ。どうなのかなって」

「んー、業界では注目されるんじゃない？そんな一般的な芸能人は違うからね、騒がれる程じゃないでしょ」

「そっか…」

オレは、ほつと胸を撫で下ろした。

また、モヤモヤするな。めぐが活躍するのって良い事じゃないか。自慢出来ることじゃないのか？

だけど安心した。

「ほら、ぼーっとしてないで動く！あそこで留美ちゃんがあたふたしてるよ」

そう言っつて園田先輩が指差した先には神崎さんがお客さんの質問責めにあっていた。

「オレじゃまだ役に立たないですよ」

「よく見てみな…」

そう言われて見ると、どうやら楽器の質問じゃなく神崎さん自身への質問責めのようなだった。若い男だ。

「で、どうしろと？」

「留美ちゃん困ってるじゃん？こういう時に動くのは男でしょ？オレの留美に手を出すな！って」

「よく意味がわからないですけど楽器のことじゃないなら行ってきます」

「アディオス！」

まあ、ホントに困ってるみたいだからな。ここはオレが。

そして様子をうかがいつつオレは二人に近付いて行った。

「ねーねー、メルアド教えてよー」

「えっ、いや、あの…」

ふーん、神崎さんが好みなんだ、この人。なんて呑気なこと考えてる場合じゃないか。

「お客様」

「あ？何？呼んでないけど」

オレをギロツと睨んで男は言った。

ま、負けるなオレ！

「すみません、そちらの者はまだ不慣れです。お困りでしたら私

が代わりに承ります。神崎さん、店長が呼んでいます」

「え？は、はい」

そうやって神崎さんを逃がした。

「ちっ」

軽く舌打ちをしてその男は帰って行った。

「ふうっ」

オレもよくもまあいけしゃあしゃあとあんな嘘が飛び出したものだ。

こういうこともあるんだな。接客業だし、お客さんと恋愛なんてこともなきにしもあらずってか。

「椿くん」

「あっ、神崎さん。大丈夫だった？」

「店長、私のこと呼んでなかったよ？」

あれ、園田先輩見てたんじゃないのか？オレを行かせるだけ行かせて…。

「い、いや、困ってたみたいだったからさ。ウソついたんだよ」

「あ、そうなんだ…あ、ありがとう。お、男の人って怖いよね」

歓迎会であの神崎さんの乱れっぷりを見たオレは、この言葉が本心なのかどうか気がになるところだった。

「今の神崎さんって、素？」

「え？素って、何が？」

「いや、酒入った時の神崎さん別人みたいだったからさ」

「あっ！そ、そうなんだよね。よく言われるんだけど、い、いつも覚えてなくて…。な、何かした？」

「いや、な、ならいいんだ」

自覚はないんだな。変わり過ぎだもんな。

「ストレス溜まるんだよね…これ…」

「え？なに？」

「う、ううん。なんでもない」

よく聞こえなかった。神崎さんの声は大きい方じゃないけど…。

ストレス？

「ほ、ほら、仕事しよ」

「う、うん」

ストレスか。まあ、人それぞれいろいろあるからなあ。

仕事を終えて家に帰る。

途中でコンビニに寄り、弁当を買って帰る。この生活が続いていた。帰り道でもめぐることが気になっていた。電話してみようと思う。テレビのこと黙ってた……ってことなんだよな。知ってたら録画とかも出来たのに。

家に着いて、まず洗濯機を回す。その間に夕食を済ませて干してある洗濯物をたたむ。もう慣れた作業だ。そしてシャワーを浴びて洗濯物を干す。

落ち着いたら携帯を手に取り、コーヒー牛乳片手にめぐに電話をかける。

プルルル……。

『もしもし、誠二くん？』

「めぐ、お疲れ様」

『うん、今落ち着いたの？』

「そ、洗濯物干したとこだよ」

『ちゃんとしわ伸ばした？』

「バッチリさ」

『ふふっ……何か変わったことはあった？』

いつもの会話だ。めぐは何かとオレのこと……じゃなく家のことを気にかけていた。

「亜美のやつが職場に来たよ」

『えっ？……それで？』

おっと、声色が変わった。ブラックめぐの登場だ。

「ただドラムスティック買いに来ただけだよ。先輩らしくみんなの分まで」

『ふーん……それだけならいいけど……』

亜美には厳しいからな、めぐは。

「なあ、亜美が言ってたんだけど、めぐテレビに出てたらしいじゃん」

『あつ……あはは……ばれちゃったか。出てたっていうよりちょっと映っただけだよ。恥ずかしいから黙ってたんだ』

オレはその言葉に何故か安心出来た。

「知ってたらビデオにでも録っておいたのに」

『イヤだよお。緊張してガツチガチだったし』

「ははっ！だから見たいんじゃない！」

『もうっ、意地悪』

いつも通りに話してた。何も変わらない。

「いつ、帰って来る？」

『なあに？誠二くん寂しいのー？』

めぐがまるで仕返しのように意地悪に聞いてくる。

「ああ、寂しい」

『…へ？お、終わったらすぐに帰ってくるから！』

ふっ、かわいいなあ、めぐは。

「うん。待つてるから。残りの公演、頑張れよ」

『うん！うん！頑張って早く終わらせる！』

いや、頑張って早く終わるもんじゃないだろ。相変わらずだな、めぐ。

その一週間後の午前二時。そんな夜中にめぐは帰って来た。

もう一泊の予定を繰り上げて帰って来たそうだ。

神崎 留美

「お、おはよう。椿くん」

「あ、おはよう。神崎さん」

そろそろ仕事が始まって一ヶ月が経とうとしていた。ある程度仕事の内容も覚えて、一人でも接客出来る程度にはなったかな。

職場の先輩たちとも打ち解けているんな話しをするようになった。だけど神崎さんだけは相変わらず。まだオレに慣れてくれないのか拳動不審な話し方は変わらない。オレだけに対してじゃないみたいけど。園田先輩とは普通に話しているみたいだ。

せっかく同じ職場なんだからもっと仲良くしたい。そう思う今日この頃。

「ねえ、神崎さん」

「な、なに？」

「昔っからそんな感じなの？恥ずかしがって話すっていつか……」

「え……あ……うん。そ、そうかな……」

「まえ バンドやってたって言ってたけど、そのバンドどうなったの？」

「か、解散しちゃった。私がみんなとウマが合わなくて……」

「ふーん……」

そんな、ウマが合わないから解散って、どんなやつらと組んでたんだ？神崎さんがおとなし過ぎたからダメだったのか？

「またしよつとは思わないの？」

「う、うん。疲れるし」

「仕事しながらだとねー」

「うん。じ、時間とかも合わないし」

「そうだよね、バンドではどんな曲やってたの？」

「……ちっ……うっぎ……」

……え？舌打ち？ウザイ？オレの聞き間違いか？神崎さんの口から

ウザイなんて言葉が出るなんて…。

「あ、あの…神崎…さん？」

「な、なに？あ、ミーティング始まるよ」

「あ、うん」

うん、いつもの神埼さんだ。やっぱり気のせいかな？

今日は店長が休みで坂本先輩がミーティングをしていた。朝っぱらから大声で挨拶練習だ。まだ有線放送が流れていないフロア全体に響き渡る。園田先輩は楽しそうにやってたけど神崎さんはずっと恥ずかしそうにしていた。

そしていつものように店を開けてお客さんを迎える準備をする。

今日は楽器のメンテナンスを教えてもらう予定になっていた。大休午前中は暇なのでさっそく作業に取り掛かる。

今日の講師は神埼さんだ。ギターの弦の張り替え方を教えてもらう。

「じ、じゃあまずこのアコースティックギターからね。エ、エレキはまた後でね」

「やり方違うの？」

作業はレジのそばにある作業スペースを使って行う。オレは初めてのことに少しワクワクしていた。

「い、一応商品だから傷つけないようにね」

さっそくギターに向かって手を伸ばしていたオレの動きが止まる。

「も、もし傷つけたら？」

「お、お買い上げ、ありがとうございます」

…こりゃ慎重にやらないと。

それから神崎さんに手ほどきを受けていたんだが…オレは見てはいけないものを見てしまったんだ。

「ま、まずは弦の張りを緩めて」

神崎さんに指示されるままにペグというツマミを回して弦を緩めていく。

「そうそう。今度は下のピンを抜いて」

弦をある程度まで緩めたところで下部で弦を固定してあるブリッジピンを抜く。

「ゆ、ゆっくりね。傷つけないように」

布を当てて傷がつかないようにしてペンチを使って抜いた。しっかり止まっていて、結構力いっぱい引かないと抜けなかった。

「じゃあ弦を外すよ」

オレは弦を外して傍らに置いた。

そして新しい弦を取ろうとした時…。

ガコツ。

見にかけていたエプロンにギターが引っかかって作業台から落ちそうになった。

「危ない！」

もう落ちてしまう！という寸でのところでオレはなんとかギターの命、もといオレの小遣いを救った。

「あーっ、よかったあ」

神崎さんが安堵のため息をついて肩の力を抜き、手をついた。

でも、そこにはさっき外したばかりの弦が置いてあったんだ。神

崎さんは弦を巻いてあった部分にちょうど右手を乗せてしまった。思い切り。

「……………っ！！」

神崎さんは声にならない叫び声を上げた。その表情から相当痛かったことが伝わる。

「だ、大丈夫？神崎さん」

その直後だ。オレは自分の目と耳を疑った。

「くっそ…！いつつたいなっ！ちつくしょ…！！」

……………ホワツツ！？

何が起こった！？

オレの目の前には、右手を押さえながら外した弦を鋭い目つきで恨めしそうに睨んでいる神崎さんの姿があった。おまけにちくしょ

ーとは。

オレは言葉を失いぼーぜんとその姿を見つめていた。  
!!!!

そして神崎さんはハツと気がついたように顔をうつむけた。  
そして…。

「い、痛いなあ。あ、危ないよ、こんなところに置いてちゃ  
……えーっと…。

神崎さんは頬を膨らませ、涙目でオレを見ていた。鋭い目つきが  
ウソのように。

オレはまだフリーズしたままだ。

さっきのは…聞き間違い見間違いじゃあない。

そのまま数秒の時間が流れた。

「あは……はは……ダメ？」

コクコク…。

神崎さんのその問いにオレは首を縦に振るだけだった。

「……なーんだ、せつかくここまで恥ずかしキャラで徹して来たの  
にさ」

恥ずかしキャラ？

な、なんだ？何を言っている！？

「バレたんならもういいや。椿くん同い年だしね」

「あ、あの一……」

「なに？っていうかマジ痛かったんですけど！ほら、血い出ちゃっ  
たじゃん！」

お……おおう…。

なんだ、この変わりようは。これがあのおとなしい神崎さんなの  
か？顔つきまで変わってるぞ？

「いや…あの…ごめん」

「ホント、どうしてくれんの？はあ…最悪。お風呂でしみそう」

オ、オレは夢か幻を見ているのか？

「おうつ！どうだー？ちゃんとやってるかー？」

その時、坂本先輩が様子を見に来た。

「は、はい。椿くん、な、なかなか覚えが早いですよ」  
……うーむ……。

「そうか！どうだ？椿。瑠美は照れ屋だがメンテはうまいんだ、しつかりやれよ！」

照れ屋…その言葉に反応してしまった。

「え、えーと……あいたつ！！」

神崎さんに足を踏みつけられた。坂本先輩に見えないように、ぐりぐりと。

「ん？どうしたあ？」

「なにすん……」

そう文句を言おうかと神崎さんを見ると、にこやかな笑顔で坂本先輩を見つつオレの足を踏んでいた。そして鋭い眼光でオレを一瞬睨んだ。

「な、何でもないつす」

「ん、忙しくなったら呼ぶからそれまでしつかりやれよ！じゃあな！」

坂本先輩が去ったあと、足を無理矢理どかす。

「あー…いつてえ…。いきなり何だよ！」

「えー？何のことお？瑠美ちゃんわかんない」

くっ、この…。白々しい！

ん…待てよ…。

「さっきバレちゃったかって言ったよな？さてはオレ意外にはまだ照れ屋だと思われてるわけだ」

「な、何言ってるの？お話しするのは、は、恥ずかしい」

こりゃ酒が入った時も合わせて三重人格決定だな。

「そんな目で見ないでよ。いいから続けよう。椿くんが覚えないとまた私に面倒かかるんだからさ」

オレはどんな目を見てた？いや、それよりこのままスルーしていいのか？

「あの……な…」

「何でこんなことしてるか、なんて聞かないでね。別に意味はないし」

「ふーん…」

「って、真に受けちゃったけどそんなわけないよな。こんな面倒くさいこと。」

「なんでこんな面倒なことしてる？」

「うっさいなー。聞かないでって言ったのに、その頭にはちゃんと言語機能備わってるの？」

「こ、こいつ…。」

タイプは少し違うが紗耶香と同格だな。

「意味ないって言ったじゃん。椿くんに話したって意味ないの。わかったらさっさとやってよ、仕事なんだから」

「わ、わかったよ」

きつついなー、こいつ。

今までのイメージがあるからさらにきつく感じるぞ。口の悪さは紗耶香以上だな。

(なんですってー!!)

ゾクツ…。

おう…。オレの中に染み付いた紗耶香の怨念が…。

「っていうかやり方教えてくれよ」

「あっ、そうか。えっとねー、その弦の丸っこい方をブリッジピンで止めて」

ふーん、仕事に対しては素直なんだな。ま、こんな感じだけど悪いやつじゃなさそう。

見た目は本当におとなしそうなかわいい子なのに。その見た目からするとギャップありすぎ。

そんなことを考えているとオレはわずかに笑ってしまった。

「なに？笑うような作業じゃないと思うけど？」

「あー、いや、違うんだ。すまんすまん。すごいな、神崎さんは」

「まあ、昔っから楽器は扱ってたから…」

そういう意味じゃなくてギャップのことなんだがまあいいか。  
「っていうか普通だね」

突然に神崎さんがそう言った。

「え？何が？」

「性格悪いとか思わないの？」

なんだ、気にしてるのか？

「自分でわかってるんならどうにかすればいいだろ」

「だからどうにかやってるんじゃない……あっ……」  
なるほど……。

自分がそういう性格だっと思ってるからわざわざ良い子ちゃんぶ  
ってるんだ。

神崎さんはしまったという顔で目を反らした。

「面倒なことしてるんだな。そんなことしなくても……」

「あんまり……あんまり人と関わらないなら、嫌われることもないし」  
「ふーん……」

オレはそれ以上聞こうとしなかった。少し悲しそうな顔を見せた  
から。

「あの時はね、私が悪かったの」  
って、自分から語り始めたよ。

そう思っていると神崎さんはチラッとこっちを見た。

「な、何があっただんだ？」

そう聞くと少し表情が明るくなった。

「しつっこいなあ。そんなに聞きたいの？」  
なんなんだ……。

「いや、言いたくないなら別に」

「そ、そう……」

また表情が暗くなる。

「でも、少し気になるかな」

「し、しょうがないな。そんなに聞きたいなら話してあげてもいい  
んだけど……」

そしてまた明るく。

…おもしろいかも。

「でも、ホントは言いたくないんだろ？」

「えっ、う、うん。そうだけど、このまま話さないのも椿くんがかわいそうかなって…」

ククツ…こいつがちまたで噂のツンなんたらってやつか？

「な、何がおかしいの？べ、別に聞いて欲しいってわけじゃないからね！」

キターーーー！！

「ならいいよ。やっぱりそんなに気にならないような感じだし」

やっぱりオレってSなんだろうな。

「な、なによ！人が話してあげるって言うてるんだから素直に聞けばいいじゃない！」

おっ、キレた。

「それより仕事は？片付けないといけないんじゃないか？」

聞きたいけど後でも聞けるから後で聞いてやろう。先にやることやらないとな。神崎さんに教えてもらわないと全然進まないし。オレも先輩に説教されたくないしな。

「むっ…そ、そうだね。えっとー、ピンで止めたら弦の先をペグに通して、それから綺麗に巻いていってね。商品なんだから本気で綺麗にね」

「はいはいっと。すぐに終わらせるよ」

「真面目に聞いているの？これくらい小学生でも出来るんだからね。

あっ、ごめん。小学生以下の頭だったんなら謝るよ」

こいつ…やっぱりムカつく。

.....

こんにちはー！

相田恵です！

もしかしたら今回私の出番がないんじゃないかって内心焦ってたあ。サブタイトルがサブタイトルだから、明らかに私なんて関係なさそう…みたいなこと思ってた。

と、いうわけで、今日は家のことも済ませたし早々と夕食の支度もしたことで、誠二さんの職場に遊びに行ってみようと思ってるんだ。

うふふ…誠二さんには何にも言っていないからびっくりするだろうなあ。

まあ実際、私も誠二さんの働いてる姿も働いてる環境にも興味があるし、それにどんな女の人がいるのか…お買い物ついでにこれは要チェックしとかなきゃね。これが目的じゃないもん！

少しだけ外出用におめかしして誠二さんの働いてるショッピングモールに向かう。バスで向かう途中でこの道が誠二さんが毎日通る道かあ、なんてちょっとだけ一体感を味わっていたんだ。

黒岩町のそのショッピングモールは目立つ建物ですぐにわかったエレベーターの前に立って各階の店舗案内に目を通す。それから場所を確認して誠二さんの働いてる楽器店に向かった。

ちよつとだけドキドキ。

どんな反応するんだろうなあ。

チーン…。

エレベーターを降りてすぐのところに楽器店はあった。さーて、

誠二くんは…。

あっ！いたっ！

レジ横のスペースで誠二くんを発見！

んー、何やら作業中のご様子だね。…女のスタッフの人と二人で！うふふ…お仕事なんだから。そう、お仕事なんだからね、別に二人で遊んでるわけじゃないんだし。

メガネをかけてかわいい人だな。私たちと同一年くらいかな。

さーて…いざ、誠二さんに声を…。

「あ、い、いらっしやいませ」

まず私に気が付いたのはその誠二さんと一緒に作業していた女の人。挙動不審な感じだな。おとなしい人なのかな、そんな感じに見えるけど。なんとなく舞ちやんっぽい。

「あ、いらっしやいませ！」

その女の人に反応して、誠二くんが下を向いて作業していた顔を上げてにこやかに営業スマイルで「いらっしやいませ」と言ってくれた。それを見て思わずにんまりしてしまう。

にんまー…。

「つて、め、めぐ!?!」

「えへへ…。来ちゃった…」

誠二くんだったらやっぱりすごく驚いて思わず立ち上がるまで。その様子が可笑しくて可笑しくて、それだけでもここまで来た甲斐があったかな。

「ど、どうしたんだよ?」

「今日は早目に家のこと終わったから、どんなお仕事してるのかなーって。お買い物がてらにね」

「そ、そうなんだ…」

恥ずかしいのか顔を赤くしてうつむいた。かわいいなあ誠二くん。

「椿くん、し、知り合い?」

「ああ、彼女のめぐだよ」

隣で一緒に作業していた女の人が私のことを誠二さんに尋ねた。

まあ、そこまで仲良さそうには見えないけど。タメ口だな、じゃあやっぱり同い年?

「彼女…。なーんだ、じゃあいつか」

な、何?

私が誠二くんの彼女だってわかったと勝手に隣の女の人は顔つきから喋り方まで変わっちゃった。

「は?何がいいんだよ?」

誠二くんはこういうことかと聞いてるみたい。

「だって彼女なら私のことなんてどうせ話しちゃうでしょ？それなら隠す必要なんてないし。面倒だし」

「はあ…。いつも普通にしたりやいいのにさ。めぐ、えーと…こいつは神崎さん。同い年だけど先輩なんだ」

そうやってその神崎さんっていう人を紹介してくれた。

ペコリ…。

神崎さんは軽く私に会釈した。

「初めまして。相田恵です。誠二くんがいつもお世話になってます」

「いーえー。椿くんにあなたみたいな美人の彼女がいるなんて驚きです。驚き過ぎてこの世の中の全てが間違ってるんじゃないかって思うくらい」

…ん？ど、どういう意味なんだろうな。

「ひでー…。一度タガが外れたらこれかよ」

な、何の話してるんだろう。

「めぐ、気にしないでいいからな。こいつこう見えて口悪いんだ」

誠二くん…面と向かってそんなこと…。

「椿くんひどおーい。…私のこと汚したくせに」

「なっ…！！」

よ、汚した！？そ、それってどういう意味？も、もしかして…。

「変なこと言うな！めぐは誤解しやすいんだから」

「せ、誠二くん…ど、どういう意味かな？」

「お、おい…。めぐ、まず話を聞くんだ。汚したんじゃないって傷つけたっていうか」

「きっ…！？」

傷つけたって…こ、この人の、は、初めてを？

「痛かった…。椿くん、すぐに終わらせるって…。声も出ない痛みだった」

そんな…私とで慣れたからって…。

「ややこしくすんな！…お、おい、めぐ？」

「せ…誠二くん…」

「ま、待って…。話を聞いてくれ」

「うっ…」

ボロボロ…。

信じてたのに…。誠二くんのこと信じてたのに…。

「な、泣かないでくれよ。誤解だって。言い方が悪かった！ホントに！ちゃんと説明するから聞いてくれ！」

「あーあ…彼女泣かせちゃったー。さいてー」

「お前のせいだろ！」

「うっ…うっ…」

「傷つけたっていうのはただギターの弦でこいつが手を怪我しただけなんだって！その弦を置いたのがオレだから…。ああー！もう！めぐっ！」

チュツ。

「んっ…せ…誠二…くん…？」

誠二くんが強引に泣いている私にキスをした。

「めぐ…。オレを見て…。オレはめぐしか見てないんだから。これまでもそうだっただろ？めぐを悲しませるようなことは絶対しないって」

「あっ…」

そ、そうだ…。誠二くんがそんなことするわけないんだ。私つたら…。こんな誠二くんの真剣なまなざしに嘘なんてない。

「ご、ごめんなさい。誠二くん。私…」

「いいって。オレも悪かったよ」

チュツ。

そしてまた優しくキスしてくれた。

「えへへ…。大好き、誠二くん」

「オレも…。大好きだよ」

バカな私。

「あのー…。一応仕事だし私の目の前なんですけど？」

はうつ！わ、忘れてた！

「ホント、世の中間違ってる。こんなバカカップルが存在するなんて信じられない」

なんとかめぐは落ち着いてくれたけど…。

「元はと言えばお前が変なこと言うからだろ！」

「変なこと言ってるじゃないし！。血だつて出たし血で汚れたし！。そちらの煩惱胸脂肪女が勝手に勘違いしただけじゃん」

こいつ…ついにめぐにまでそんな口を。

「む、胸脂肪…。う…うふふ…。そ、そうですね。私の早とちりでしたよね。でも、言い方っていうのがありますよね？言葉を選べないなんてあなたの頭の弱さが見えちゃいますよ？」

め、めぐ？  
なんとということだ。亜美以外でもブラックめぐが出て来るなんてしかも少しパワーアップしているように感じる。

「なっ…。け、結構言ってくれるじゃん。あ、あんたこそあれだけで変な想像しちゃって、そのお乳に煩惱詰め込んでるんじゃないの？」

「う…うふふ…。ヒガミですか？ぺったんこですもんね」

おお…めぐが自分の胸を武器にするとは…。

「うぐっ…。ひ、人が気にしていることを…」

神崎さん気にしてたんだ…。ぺったんこっていう程でもないけどな。

いや、それより止めないと。

「な、なあ、もういいだろ？」

キッ！

うわっ、二人に睨まれた。

「な、仲良くしようぜ？」

「誠二くんも私が言われてるんだから何とか言ってみよ！」

「椿くんがあんなところに弦置いたからこんなことになってんでしょ！」

「ほ、矛先がオレに…？」

「ま、まあまあ落ち着いて…仕事なんだし…」

「あ…。わ、私、誠二くんの邪魔しちゃった…？」

「仕事中にキスなんてしてたのはどこのどちらさん方よ」  
「うっ…。」

「せ、先輩たちには黙っててくれよ？」

「えーん…どうしよっかなあ」

「お、お願い。誠二くんに迷惑かけたくないから」  
不本意ながらも二人で神崎さんに頭を下げた。

「な、なに、二人して。あーもう、見てらんない。興冷めしちゃった。つまんない」

「黙っててくれるか？」

「でも言ったら楽しそうだしねー」

「お前が恥ずかしキヤラ作ってるのも言うぞ？」

「うっ…」

「恥ずかしキヤラ？」

めぐが不思議そうに聞いてきたので神崎さんが自分の性格を隠すためにキヤラを作っていることを教えた。

「あっははは！そんなことしてたんだ！」

「な、なによ。バカ笑いしないでよね！こっちだって頑張ってるんだから！」

話しをするためぐはおもしろ可笑しそうに笑っていた。

「ははっ、面倒なことしてるんだ。…でも、気持ちわからなくもないよ」

「え？」

「私も昔いじめられてさ、自分を隠してたんだよね」

「わ、わかる！？わかってくれる！？」

「う、うん。ちょっと意味合いは違うけど」

神崎さんはめぐが気持ちをわかるといふことに喰らいついてきた。神崎さんの過去に何があったかは知らないけど、いじめと性格の悪さを隠すことは違うと思うぞ？

「いつも周りの人の視線気にしてないといけないのがさ、辛いよねえ」

「そうだね。私なんかは誰とも話さなかったよ」

「うんうん、わかるう。私もあんまり人と話したくないもん。だってさあ、ついつい出ちゃうんだよね。わかってるんだけど話したら嫌味とか悪口っていうのがさ」

「そ、そうなんだ」

「いやー、私の気持ちわかってくれる人に出会えるなんて感激！」

「あ…あはは…」

それからというものの、神崎さんはめぐが気に入ったらしく、オレのメンテナンス指導なんかそっちのけでめくと話し込んでいた、というより一方的に喋っていた。普段喋らない反動か知らないけどまさにマシンガントークってやつだったな。めぐだってその勢いにつと押されっぱなしだった。

実は…こんな口の悪さでも寂しかったんじゃないだろうか…。オレはそんなことを考えていた。

「せ、誠二くん。私、お買い物あるからそっち済ませて帰るね」

めぐは耐え切れなくなったのか途中で神崎さんの話を絶ち、逃げないようにして帰って行った。

神崎さんは名残惜しそくに店の外まで見送っていた。オレはその様子をなんだかなあと思いつつも笑いながら見ていた。

「いやー。ねっ、椿くん！いい彼女だね！」

戻って来てにこやかにそう言う神崎さん。

「ははっ、そりやどうも」

「私にも間違ったように素敵な彼氏が出来ないかなあ」

またオレにめぐは間違いなんで言い方…。

「自分のこと理解してくれるやつに出会えるといいな」

「な、なに？そのわかったような言い方！勝ったと思わないでよね！」

「いや、意味わかんねえ。」

「……ねえ、椿くうくん」

「こ、今度はなんだ？くねくねさせて気持ち悪い。」

「な、なに？」

「今度さあ、めぐちゃんと遊びに行きたいなあ、なんて……」

「えっ……」

「そ、そんなに嫌そうな顔しなくてもいいじゃん。ね、お願いよお」

「う、うーん……。まあ一応話してみるよ」

「きゃっ！ありがとう！」

ものすっごい笑顔。なんなんだ……。

それにしても……どれが本当の神崎さんなんだろう。悪口言ったり、こんなにかわいい一面だって。

「さ、お仕事の続きやる」

「あ、ああ……」

ホント、わっかんねえな。

まあいいか。さつさとこれを終わらせて……。

「ちよつと……さつきも教えたよね。そこは気をつけないといけないんだって。色ぼけバカ。単細胞。ゾウリムシ。公衆猥褻痴漢男」

ホント……わからねえ……。

それからなんだかんだひどい事言われながらも、今日の予定だったエレキギターとアコースティックギターの弦の張り替えを終えた。普通にしてれば早く終わってたんだらうけど、めぐが来たこともあってもうお昼になっていた。坂本先輩に休憩に入るように言われ、いつものようにスタッフルームに愛妻弁当を広げる。

ガチャッ。

「よいつしよ」

「……は？」

「なによ…」

なんでだろう、どうしてだろう。いつもは園田先輩と休憩が一緒になるのに今日は神崎さんがオレと同じ時間にスタツフルームへ入ってきた。そしてテーブルに買ってきた昼食であるう弁当を広げていた。

「園田先輩は？」

「休憩時間代わってもらった」

「なんで？」

「いいじゃん、別に」

どういづつもりだ。わざわざ代わってまでオレと同じ時間に…。いや、オレと同じ時間にしたっていうのは考え過ぎか？

お互いに何も話すことがないまま坦々と昼食を食べていた。

そこでオレの頭の中に一つのこと 생각이浮かんだ。まさか過去にあったことを話すためにわざわざ時間を合わせたんじゃないだろうか、と。

「なあ…さっき言いかけてた昔の…」

「えっ…！」

オレが話しを切り出すと驚きつつも笑顔でオレの方を振り返った。

「いや、なんでもない」

「……………」

神崎さんはオレの顔を笑顔で見たままフリーズした。

「ま、前になにがあったんだ？」

「そ、そんなに溜めこんでまで聞きたいようなら話してあげる」

う、うん…。やっぱりこんな感じなんだ。

そして神崎さんは少し長い息を吐いて話し始めた。

「私の口の悪さって、言い訳するつもりじゃないんだけど父親譲りなんだ。家の中ではいつも汚い言葉が飛び交ってた。母さんは大変だったと思うよ、いつも泣いてたし」

家庭の事情か…。小さい時からそうだったんなら仕方ないことなのかな。

「それを見るのが嫌でね、私はいつの間にか家にもあんまり帰らなくなつて学校にも行かずにブラブラ外に居たんだ。まあ、そこで声を掛けて来たのは一般的に不良つて呼ばれる人たちだったわけで、そんな人たちといつても一緒にいた」

「ふーん……」

神崎さんは懐かしむように話していた。

「みんな良い人たちだったんだけどね。ちょっと周りの人たちとは合わなかっただけで。でも私の居場所もそこしかなかったんだ。似たような人たちばかりだったし。そのグループの中の一人がギターやつててさ、私もその人に教えてもらうようになっていつの間にか音楽にハマつていったんだ」

「じゃあ、その人とバンドを？」

「違うよ。自分で言うのもなんだけど才能があつたのかな。みるみるうちにうまくなつてさ、そのギター教えてくれた人がバンドを紹介してくれたんだ。その時にそのバンドのメンバーに加わつたんだよ」

「へーっ、よかったじゃん」

「よかつたんだけどね、初めは。なまじ、自分の腕に自信があつたもんだから後から加わつたくせにいろいろ言うようになってさ。それにこの口の悪さ。最初は冗談みたいに受け止められてただけだったんだん私と話してくれなくなって、バンドの仲間の中でもごちゃごちゃなつちやつて。私のせいで」

「……………」

「それで解散しちゃつたわけ。なんてことない話しただけさ。あの時は楽しかった。それを自分で壊したの。その頃には元々私がいたグループにも知らない人たちばかり居て。帰るところがなかった。仕方なく家に戻つて部屋に閉じこもつて、学校も行かなくて。でもお母さんは優しくつたから、私にずっと話しかけてくれた」

「……だから自分を隠して？」

「そのことがあつたからじゃないけど……。それからいろんなバイト

したけどさ、私って喋らなかつたら案外可愛がられるんだよね。元々可愛いし」

「う、うん……」

「なおかつ恥ずかしくてたりしたら男の人なんかさらに可愛がつてくれちゃってさ。バカみたいな話しかけど私が見つけた周りの人とうまくやる方法。椿くんが言うとおり面倒くさいけどね。面倒だけど面倒がないんだよ」

なんとなくだけどわからなくもないかな。自分を守るっていう意味でもあるだろうけど、けっこう周りにも気をつかってるんじゃないのか？自分のせいで人が嫌な気持ちになるのが嫌なんだろ？でも自分の口が出てしまうのがわかってるから。

「自分の本当の性格って直せないからさ」

「でも、きついだろ？」

「そんなことないよ。みんな笑ってるしね」

「やっぱり……。きつと…家族が笑ってなかったんだろうな。」

「じゃあ…寂しいだろ？」

「なっ…！ななななに言ってるの！？そ、そんなことあるわけないじゃん！」

本当は人といっぱい話したいはずなんだよな。さっきのめぐと話してたように。でもついつい悪口が出ちゃって。悪気はないんだろうけど。

「いいんじゃないか？別に自分を出しても」

「…私の気も知らないで勝手なこと言わないで。椿くんだって私のこと嫌なやつだって思ったでしょ？」

「そんなこと……。いや、最初はそう思ったかも……」

「なんだ、正直だね」

「なんとも思わないのか？」

「悪口言えばそれだけ返ってくるし」

ある意味、強いのかな？

「ははっ、なんだそりゃ。返ってくるのわかってて言ってるのかよ」

「な、何が可笑しいのよ！」

「いや…。ならやつぱりいいんじゃないの？」

「え？」

「オレだつて言われたら言い返すし」

「…なに？わけわかんない」

「お前、悪いやつじゃないしね」

「なっ…！な、なに…それ…。ホントわけわかんない」

そう言つて顔を伏せる神崎さんがいた。

こんなこと言つたオレだけど、誰とでもそのままの神崎さんで大丈夫なんてことは思つてない。だけど、素が出せる人の前ではそのままでもいいんじゃないかと思つて。実際オレの前じゃそうしてるとみたいにさ。もっと他にも、わかってくれる人なら。

「つ、椿くんも…一緒にあそ…ぶ？」

照れくさそうに話す神崎さん。

「…は？」

「その…めぐちゃんと…三人で…。べつ、別に私が椿くんと遊びたいってわけじゃないからね！めぐちゃんと一緒にいいんじゃないかと思つたからだから！」

お…おいおい、どういう話しの展開だ？

こいつのこの言い方からするとオレと一緒に遊びたい…なんてことを言つてることに。

「いいよ。女二人の方が気兼ねなくていいだろ？それにまだめぐが  
いいかわかんないし」

「そ、そそそうだよね！」

「でも、たまにはいいかもなんて思つたりして」

「ほっ、本当！？」

「…ん？なんだ？オレが居たほうがいいの？」

「そつ、そんなわけないじゃん！ただ椿くんが寂しいだろうつて誘つただけだからさあ」

くっ…くっ…。

「ふーん、神崎さんって優しいんだな」

「えっ、い、いや…私は…ただ…あの…」

神崎さんは恥ずかしそうに目を背けて言った。

この変化がおもしろいんだよなあ。オレって意地悪かな。

「ま、めぐに話してからな」

「う、うん…」

でもま、ここ最近の懸念であった神崎さんと打ち解けるっていう目的？は果たせたのかもしれない。まさかこういうやつなんて思いもしなかったけど。

「まったく…かわいいのかかわいくないのか…」

「ん？なに？」

「なんでもないよ」

「ふーん、独り言が趣味なんだ」

「やっぱ全然かわいくない…」。

## 二人の幸せ

「すみません、まだですか？」

「もっ、申し訳ありません！もうしばらくお待ち下さい！」  
どうしたものの…。

仕事を初めて一ヶ月が経ったところなんだけど、そんな時にこの店の大売り出しの広告を出したらしい。それがどうしてこうして…。広告の力つてのはすごいもんなんだな。普段の何倍ものお客さんがこの店に押し寄せていた。

オレはもちろんのこと、店長も他の先輩たちも大忙しだ。オレはオレで出来ることをやっていたんだがなかなか捌けずに仕事のテンポが悪い。お客さんに「まだか？」と聞かれるのもさっきの何度目かわからないほど。

「お待たせしました！」

「はあー、やっとか…。どうも」

「ありがとうございます！」

ふうっ…。

「すいませーん！」

「はっ、はいっ！」

休む暇なんてのももちろんあつたもんじゃない。普段より遅めの休憩時間に、最近は毎日疲れ果てて帰るのが当たり前になっていた。そんな中でも嬉しいことが一つ。

なんと、初任給をもらつたんだ！

その日は早く家に帰りたい。そのことばかりを考えていた。まあ、大した金額じゃないのかもしれないけれど、自分で働いてもらったお金だから嬉しさもそれなりに大きかった。めぐには今日が給料日だということは話してないから普段通りに家のことをしているだろう。次の休みあたりにはどこかに遊びにでも行こうか、ひそかに思っていた。

「お疲れ様でしたー！」

「おーおー急いじゃって。今日は豪華なディナーかな？」

オレが急ぎ足に帰ろうとしていると園田先輩がからかうようにそんなことを言ってきた。

「何もないですけど、早く彼女に給料もらったことを話したいなって」

「喜ぶ愛しの彼女の顔が見たいかー。羨ましいねえ」

「からかわないで下さい。それじゃ、お疲れ様でしたー！」

「はーいはい。また明日ねー」

そして急いでバス停まで走りなんとかいつもより早いバスに間に合った。めぐはどんな反応をするんだろう。別にめぐが喜ぶわけじゃないかな？そんなことを考えながら帰っていた。

.....

「こんなに……」

今日は私の講座にこの前のお給料が振り込まれる日だったんだ。

給料明細は送られてきてたんだけど、初めてのお給料だったからさっそく銀行に確認しに来てた。思っていた以上の金額が振り込まれていて私自身が驚いてしまった。

これって……大体聞いてた誠二くんのお給料よりもずいぶん多い。

どうなんだろう、こんなので誠二くんに言った方がいいのかなお給料は嬉しいんだけど複雑な気持ち。

こんなので男の人を立てた方がいいんだよね……。誠二くん頑張って仕事してるみたいだし……。あー……どうしよう。でも言わないでおくのも隠し事してるみたいで気持ち悪いし。

気にしないかな、誠二くんだったら……。

こんなことを考えながらその日は過ごしていた。

.....

緑ヶ丘町でバスを降りると、足は自然に急ぎ足になっていた。なんともしれない高ぶる気持ちを抑えながら家を目指して歩く。

「ただいまー」

「あつ、おかえりなさい。誠二くん」

玄関のドアを開けるといつもエプロン姿のめぐが迎えてくれる。

その度に一緒に住んでいる喜びを味わって、同時に一日の疲れが癒される瞬間でもあった。そしてこの時間にはめぐが作ってくれている夕食の匂いが家の中に漂っていた。

「今日の夕飯、もう少し時間かかるから先にお風呂済ませて来て？」

「ああ、わかったよ」

給料の話は夕食の話しに取っておいて先に風呂を済ませる。じれったく思いながらも風呂で体の疲れを癒し、もうすぐ来るであろうその瞬間を頭に思い浮かべていた。

風呂上がりにはもうすでに夕食の準備は終わっていて、リビングのテーブルに夕食が並べられてあった。いつものことながらめぐが座る席にだけ小さなサラダが置かれていた。たまには食べないとなあなんて思いながらもオレの箸がそこに進むことはなかった。

めぐがテーブルに着くのを待ってからお互いに「いただきます」の声で料理に手をつける。

「めぐ……いつもありがとうな」

「え？どうしたの？誠二くんのために作る料理なんて苦にならないよ」

めぐは不思議そうに笑いながらそう言う。

「実はさ、今日給料日だったんだ」

「えっ……！」

めぐは思ったとおり驚いた顔をした。でもその表情はなんとも言えない複雑そうな顔だった。少し気になるところではあるんだけど…。

「よ、よかったね！おめでとう！」

お、おめでとう？うん、いや、祝福されてるんだな。

「ありがとう。だからさ、日ごろの感謝も込めて今度の休みにでもどっか遊びに行こうか？」

「えっ！ホント！？誠二さんとデートなんて久しぶりだから嬉しい！」

やっぱりこっちの方が喜んでくれるみたいだな。

なにせよ、めぐの笑った顔が見れることが一番だ。

……

ど、どうしよう…。誠二くんの方からお給料の話しが出ちゃった。私も言った方がいいかな？だってもうもらってるのに黙ってるなんて隠し事だよ。後で聞かれてから言うよりも今話したほうが…。

「あ、あのさ、誠二くん…」

「ん？なに？遊園地デートは勘弁して欲しいな」

私が言いにくそうな態度を取ったからそう思われたみたい。誠二くん絶叫物苦手だしね…。デートかあ。デートの場所はあ…。つてそんなことより、いや、それも大事だけど…。

「わ、私も今日お給料日だったんだあ」

「え？へーっ！そうだったんだ！よかったじゃないか！」

誠二くんは少し驚いたあと、笑ってそう言った。

「う、うん」

私はぎこちない笑顔で答えた。

「どうしたの？」

それに誠二くんが不思議そうに尋ねてくる。

「な、なんでもないよ！デ、デートどうしよっか？」

「そうだなあ。……めぐってなにか欲しいものとかないの？」

「え……？特にないかなあ……」

お給料で何かプレゼントしてくれようとしてるのかな？

「私は何もいらなからさ、誠二くんの好きなゲームでも買ったら？」

「うーん……。いや……。やっぱり貯金しよう。ほら……結婚資金  
なんかに……」

け、結婚資金……。

「誠二くん……」

「計画的にさ、オレが頑張ろうとしてるのもそのためなんだし。

その……めぐと……早く一緒になりたいし……」

……嬉しいな。やっぱり誠二くんなんだ。恥ずかしそうにそう言  
う誠二くんがかわいかった。

「じゃあ……私も貯金しなきゃね」

「めぐはいいよ。オレが頑張らないと。男なんだし」

「そんなのダメだよ。二人の目標だったでしょ？私だって誠二くん  
と同じ気持ちなんだから」

「そっか……。ごめん。じゃあ決めよう。毎月にくらずつ貯金す  
るか」

誠二くんからのこんな提案。

これって……これってさ……。

「めぐは、その……いくら給料もらったんだ？オレはこれ……」

誠二くんはそう言って給料明細を取り出した。

あ……やぶへびだったかな……。誠二くん、何とも思わないか  
な。誠二くんが見せてくれた給料明細の金額はやっぱり聞いていた  
通りで私のお給料の方が多かった。

「わ、私は……これだけ……」

そっと、誠二くんの前に給料明細を差し出した。

「ん？うおー！　すごいな、めぐ！　オレよりずいぶん多いじゃん。さすがめぐだな」

そんなことを言いながら驚いていた。思ってたよりも普通のリアクションだった。なんだ、なにも心配することなかったんだとほっと胸をなでおろしていたんだ。

そのあと、誠二くんは給料について触れることはなく、結婚資金ってどれくらいかかるんだろう、とか、車の免許も取らないとなあなんてことを話していた。

そして誠二くんは夕食を終えて、先にお風呂済ませるよって浴室に向かった。

えっ！？　お風呂！？

誠二くん、思いつきり動揺してる……。

風呂って……オレ、さつき入ったよな……？

……かっこわりい。思いつきり動揺してんじゃん。

い、いやいや、めぐの方がそりや立派な仕事しててさ、それなりに才能や努力してなきゃあんなになれないんだし、そこはめぐが頑張った結果だつて喜ぶとこじゃないのか、オレ。

でもさ……オレだつてオレなりに結構頑張ったんだ。それであれだけ差がついてりや落ち込みたくもなる。

この仕事を選んだのはオレで、楽しい職場だし、割と満足してるんだ。

給料……金……か。

今だつてめぐの家に世話になつてて、先月の生活費だつてオレはほとんど払っちゃいない。食費がどれだけかかっているのか、電気代とか、そんなのもまるで知らない。

めぐを守るとか大口叩いておいてこれだもんな……。

オレがめぐに守られてるみたいじゃん。いや、実際そうなのか。

「せ、誠二くん、湯加減どう？」

バスルームの外からめぐが気まずそうにそんなことを聞いてきた。オレがさつき風呂に入ったことくらいわかってるんだよな。それでも気がつかないふりしてるのか。

「ち、ちようどいいよ」

オレはガラス戸の向こうに見えるめぐの影を見て返事をした。

「そ、そっか。よかった」

めぐはオレの声を確認したあと、またリビングに戻って行った。

さて、どんな顔して戻るかな……。

このまま何事もなかったのように「良い湯だったー」とか言つて、今日二本目のコーヒー牛乳を一気飲み。って自然に振る舞える気がしない……。

でも、そうするしかないかな。

オレは普段通りに振る舞うことを決めて、バスルームを出た。

リビングに戻ると、めぐはもう食器を片付け終わっていて、テーブルに座って二人の給料明細を眺めていた。

めぐは軽い微笑みを浮かべていた。

「あつ、誠二くん。さっきの話しなんだけど、貯金つて、どうしようか？」

「あ、ああ。そうだな、オレはお金の管理とかそういうの苦手だからさ、めぐに任せたいな」

「えっ、わ、私に？ でも、二人のお給料だから、ちゃんと二人で……」

やっぱりそうなるよな。

「ん……じゃあ、二人の給料から三万ずつ……くらい、っていうのは？」

それが大体オレの給料の四分の一の金額だった。

あとは生活費としてめぐに渡すとして、オレの小遣いは……いくらぐらいになるんだろうな。

そんな自分の給料のことを計算していると、

「それじゃ誠二くんの方が多割合になるよ。私の方からもっと多

く貯金した方が……」

「そ、そんなのいいって。さっき言っただじやないか。二人のお給料だって。それなら公平に同じ金額でいいじゃん」

「でも……」

「オレはめぐを守るって決めたんだ。オレがしつかりしないと。オレが頑張るんだ。オレがめぐを幸せにする。めぐは何もしなくてもいいんだ」

「……ち……違うよ。そんなの違うよ」

めぐはうつむいてぐっと拳を握り締めた。

オレも嫌な雰囲気の流れ出したことを感じた。

「だって私たち二人のことでしょ？ 誠二くんが一人で頑張ったってそれは誠二くんの自己満足じゃない！」

めぐは少しだけ涙を浮かべて訴えるように叫んだ。こんなめぐを見るのは初めてだ。

オレはそのことに気が動転していたのが、めぐの言葉を素直に聞くこともできなかった。

「じ、自己満足ってなんだよ！ オレはめぐのためを思って言ったのに！」

「私のため？ 私のためって、何が私のためになるかなんて誠二くんちゃんとわかってるの！？」

「何がって……」

「ほら、答えられない」

ど、どうしたんだ今日のめぐは？

こんなに怒気の感情を露わにしてオレに話すことなんて……。オレはめぐの勢いに思わず気圧されてしまう。

「私は……誠二くんを守ってもらおうとか思って、フランスから帰ってきたわけじゃない」

「め……ぐ……？」

「私はただ誠二くんのそばにいたかったから。私は誠二くんのそばにいられば幸せだったから」

そ、それならいいじゃないか。オレが頑張つて。めぐはオレの帰りを待っていてくれて、それじゃダメなのか？

「でも、今の誠二くんは、ただ意地を張ってるだけだよ。誠二くんは本当に私のために頑張ってくれてるの？ 自分のためじゃないの？」

「……………」  
自分の……………ため？

そんなことない……………オレは、めぐのために、一生懸命頑張ろうつて。そう思ってきたんだ。高校にいるときも、これまでも、これからだって。

だから、一生懸命働いて、お金貯めて、幸せな家庭を作つて……………。  
幸せ……………。  
幸せつてなんなんだ？

オレにとつての幸せ、めぐにとつての幸せ、二人にとつての幸せつて……………。  
オレは……………話していたように、めぐと結婚して、暖かい、めぐがいつでも笑ってられるような家族になりたいって。

でも、めぐは？ めぐは今笑ってないじゃないか。  
どうして……………？

「私は、一緒に頑張つて、一緒に幸せになりたい」  
めぐは懇願するような眼差しをオレに向けていた。  
一緒に頑張つて、一緒に幸せに……………。

……………ホントにガキだな、オレ。  
幸せになるうって、言つてたじゃないか。オレが幸せにしてやるんじゃないんだ。

本当に、何を意地張っていたのか。めぐの方がいい給料をもらつてたから。確かにそうだ。

でも、それが何だつて言つんだ。  
めぐがすごいやつだつてことはわかりきつてたことじゃないか。  
だから、オレはめぐに追いつこうとした。何か、紗耶香にそれっ

ばいこと言われてた気がする。

頑張らないわけじゃない。

だからって、焦ったってしょうがない。背伸びしたってしょうがない。

オレはオレなんだ。

「めぐ……、今度の休み、たまにはゲーセンとか行ってみようか？」

「……誠二くん」

めぐは笑って頷いてくれた。

普通なんだな、焦ってどうのこうのしようたってダメなんだ。

めぐの気持ちに足並み合わせて、普通に二人の時を大事にして。

目標だっと思ってためぐとの結婚。

目標じゃなくて、オレとめぐが一緒に歩いた結果なんだ。

「……へへっ、久しぶりにプリクラ撮ろうよ」

「久しぶりだなあ。じゃあ、オレの太鼓の相手もしてくれよ？」

「えー、あれちょっと苦手だもん」

こんなのでいいんだよな。特別なことなんていらなんだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8078m/>

---

あなたのそばですっと～after～

2010年10月29日23時10分発行